室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

アメリカ英語における方言の研究

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-06-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 武本, 昌三
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3299

アメリカ英語における方言の研究

武本昌三

A Treatise on the Regional and Social Variations of American English

Shozo Takemoto

Abstract

American English has traditionally been considered as existing in three main dialects—that of New England, of the South, and of the great region comprising the Middle Atlantic states, the Middle West, and the Far West, which is often called General American.

Recent researches are, however, indicating that the situation is somewhat more complicated socially as well as geographically. Charles K. Thomas, for instance, tried so far as to divide the entire country into ten major speech areas, and also the investigation made by Hans Kurath and others under the Linguistic Atlas project has reinforced the diversified situation.

Since, on the other hand, dialect survives only through some kind of isolation, and since there is much mixture, movement and intercommunication of the American population, the differences among the dialects seem inevitably to be getting less, and this makes the collection of a trustworthy body of information upon the regional variations somewhat difficult and delicate a matter.

These seeming contradictory evidences are virtually the features characteristic of the American dialects. The present writer, therefore, must keep them in mind when he tries to get an overall picture of the regional and social variations as they are in the United States of America today.

目　次

1. 緒　言 …… 1107
2. 方言の概念 …… 1109
3. 方言の成立 …… 1111
4. 方言の調査 …… 1118
5. 方言の地域差 …… 1126
6. 結　語 …… 1147
注 …… 1150

1. 緒　言

英語は，言うまでもなく今日世界で最もひろく用いられている言語で，英，米，カナダ，オーストラリア，南アフリカ聯邦等において母国語であるのみならず，インド，イスラエル，セイロン，ジャマイカ等においても，殆んど母国語同様に用いられている。日本をも含めて外

国語としての英語を用いているいろいろな国々の国民をこれに加えれば，英語人口は飛躍的に増大し，文字通り，英語は世界の言葉ということになる。

しかし，世界中のこれだけ多くの人々が，ひとしく「英語」というラベルのついた言語を話していても，この英語は，それを用いる各国民の間ですべて同じ言葉ではない。国によってそれぞれの国特有の nuance を持った英語が用いられているのみならず，同一国内であっても，その話される英語は必らずしも一様ではない。更に厳密な言い方をすれば，同一国内の同一地域で話されている一人一人の英語でさえも，それぞれに微妙な相異が認められると言えるであろう。

アメリカ英語は，普通 American English とよばれることによって，先ず British English と区別され，Canadian English, Australian English, Jamaican English 等との相違をも予想せしめる。[1] そして又 American English そのものも，あの広大な 300 万平方マイルもある国土の中で，総人口の中 1 億 5 千万に近いと推定されるアメリカ英語常用者によって，全く一様に話されているとは信じ難い。[2] 例えば John Steinbeck の *Grapes of Wrath* の次の一節などは，American English にもはっきり地域的な variety があることを端的に示しているものとして興味深く思われる。[3]

> "I knowed you wasn't Oklahomy folks. You talk queer kinda— That ain't no blame, you understan'."
>
> "Ever'body says words different," said Ivy. "Arkansas folks says 'em different, and Oklahomy folks says 'em different. And we seen a lady from Massachusetts, an' she said 'em differentest of all. Couldn' hardly make out what she was sayin'."

このような American English における地域的差違の問題は，特にアメリカ太西洋岸の海岸線に沿って顕著であることはよく知られているが，その反面，アメリカ英語の一様性が強調されることも少なくはない。例えば Charles K. Thomas は *An Introduction to the Phonetics of American English* の中で，"Alabama and Maine can usually understand each other without too much trouble, though each may think the other a bit quaint." と述べ，更に "Over large areas, from Springfield and Hartford, on the Connecticut River, to San Diego and Seattle, on the Pacific coast, the differences are so slight that casual listeners often fail to notice them." とつけ加えている。[4]

このような見方も甚だもっともであって，たしかにアメリカ英語は，ヨーロッパの主要国語とは対照的に，イギリス英語と比べてさえ対照的に，その短かい言葉の歴史を通じて，uniformity が非常に強いと言えるかも知れない。[5] しかし，この言語における uniformity という概念は，Pyles も言っているように多分に相対的なもので，[6] 結局は主観によって，われわれは uniformity の中に variety を見ることもあれば，variety の中に uniformity を見出すこともあるのであ

ろう。前述の Pyles はこのことを次のように説明している。

> "He who looks for differences will surely find them, and very interesting and significant differences they are. The danger lies in not seeing the woods for the trees—in losing sight of the larger unity of American English by becoming absorbed in a mass of details. The linguistically unsophisticated, for instance, are prone to be so intolerant of deviations from their own usage as to exaggerate the frequency of their occurrence.
>
> It cannot be denied, of course, that a person with even one good ear is able to identify the speech of the tidewater Southerner, the eastern New Englander and the New Yorker, and to distinguish three types of speech from that of the Middle West.…"[7]

このように見てくると，アメリカ英語には variety と uniformity の両方にそれぞれ真実性があることになる。結局，一般的にはアメリカ各地で話されている英語は，全く uniform なものではないけれども，イギリスや西ヨーロッパ諸国の国語などに比べれば，はるかに variety が少ない，というような言い方が一番無難なのかも知れない。それだけに，方言に関する資料の信憑性や方言領域の overlap 等の問題は，特にアメリカ英語の方言研究には必然的につきまとう制約であるが，このような制約の中で，以下，筆者は筆者なりに，アメリカ英語における方言の概観を試みていくことにしたい。

2. 方言の概念

言語は一つの社会的現象であるから，常に個人によって行なわれる活動でありながら必らずその背景に言語社会 (speech community) の存在を予想せしめる。厳密に言えば，すでに述べたように，個々の言語活動にも個人差があるわけであるが，同一の言語社会に在って相互の社会的交渉が頻繁に行なわれる場合には，人々の間には自然に同じような言語習慣が発達する。又，言語活動を通じて，相互に理解されなければならない要求が働らくことにより，人々は一般の言語活動に対し殊更に異をたてることはないから，[8] 実際生活上，個人差は問題にならない程度で看過されてしまうのが普通である。従って，一つの社会の言語は実際上は等質であると考えられ，その社会を背景として一つの言語が認められている。しかし，このよのような言語社会が，例えば，規模が大きくなるにつれて地域的に分散し，それぞれ独自の言語習慣を将来に引継いで行ったような場合，やがては発音，語い，文法などにおいて，多かれ少なかれ，相違が生じ始めるであろう。[9] このような場合，分散した言語社会に認められている言語は，それぞれ他の言語社会の言語に対して方言 (dailect)[10] であり，これは地域的方言 (regional dialect) とよばれる。[11]

この言語社会は又，内部構造が複雑化し，社会構成員の間に政治的支配と従属，経済的貧

富の差，教育程度の相違等が生じてくると，社会は上部構造と下部構造に分れ，そのおのおのの構成員の間に，やがて使用言語の分化が起りはじめる。階級的方言 (class dialect 又は social dialect) がこれであって，prestige dialect もひろい意味ではこの中に含まれる。Francis は以上の方言のほか，standard dialect と literary dialect を加えて，方言の種類を次のように5つに分類した。[12)]

1. Dialects spoken in speech-communities occupying different parts of the general territory of a language are *regional dialects.*

2. Dialects spoken by different social groups within the same region are *soial* or *class dialects.*

3. A dialect admired and emulated by the speakers of other dialects is a *prestige dialect.*

4. A dialect generally admitted by the majority of speakers to be superior to all the other dialects in its language is the *standard dialect* of that language, or simply the *standard language.* It is usually that used by the educated and ruling classes.

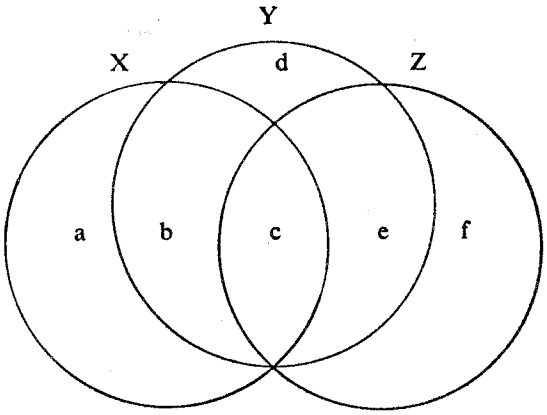
5. A dialect used primarily by writers and scholars is a *literary dialect.*

この中，standard dialect はいわゆる標準語と同じであって，これは或る特定の regional dialect から発達して来たものには違いないが，[13)] 現在では class dialect 的な色彩が強い。Literary dialect も又，文字を介してはいるが標準語の一形式であると考えられる。この標準語が普及して全国の言語が平均化してくる傾向は，特に mass communication の発達した現在，明らかな事実で，そのために方言とは区別して考えられることが少なくない。しかしながら，あくまでもこれは dialect の一つであって，dialect 以外の別の言語であると考えるのは行過ぎであり，[14)] 且つ又，standard dialect があらゆる dialect の中で "best speech" であるとする考え方も，必らずしも正当ではない。[15)]

このようにして見て来た方言の種々相は，しかし，それぞれの言語社会の中に，それぞれ単純なままの形で存在するのではない。アメリカのどの地方の方言を考えるに当っても，現実の speech community の姿は非常に複雑であり，われわれはここで更に，Fries のいう usage level の錯綜を見逃すわけにはいかない。彼はこの usage level の錯綜を，図-1 のように3つの円の交叉で表現した。[16)]

しかしながら，このような言語のあらゆる形式と様態をすべて厳密に分析しながら，アメリカの方言を考えていくには，言語調査面での制約があまりに多く，殆んど不可能というほかはない。[17)] 結局，本論文では，上述の usage level の錯綜といったようなことは特に必要な場合を除き一応無視することにして，方言を最も常識的な，regional variation という形で平面的に見ていくことで満足しなければならないであろう。以下，方言 (dialect) という言葉はその

背景にある複雑な概念を十分に意識してはいきながらも，その程度の意味でこれから用いていくことにしたい。



図—1 The interlocking circles of formal, colloquial, and illiterate English

X—formal, literary English
Y—colloquial, informal English of cultivated people
Z—illiterate, uneducated English
b, c, e, represent the overlappings of the three types
c —that which is common to all three
b —that which is common to formal and colloquial
e —that which is common to colloquial and illiterate
a, d, f represent the portions peculiar to that set of language habits

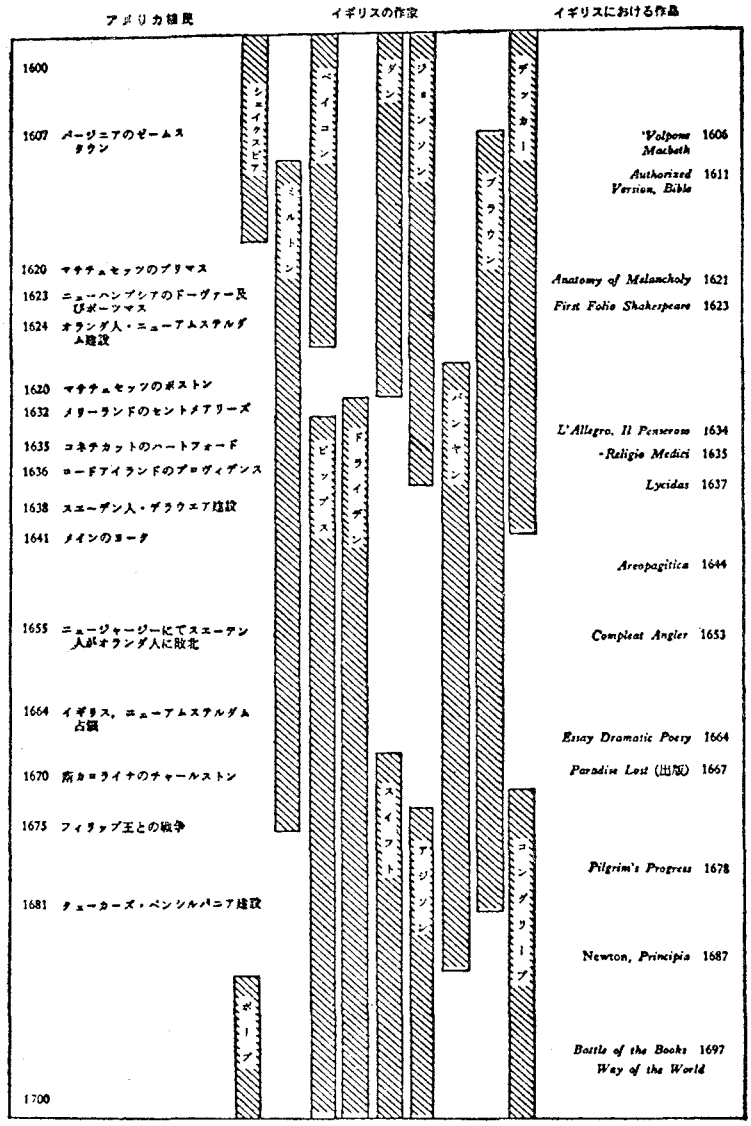
3. 方言の成立

方言の成立についてさまざまな要因が考えられるのはどこの国の場合でも同じである。しかしアメリカの場合，特に重要なのは植民地時代にさかのぼる歴史的要因であろう。

われわれは先ず，現在のアメリカ英語が17世紀のはじめ英国からの植民者達によって使われていた英語から始まっていることを忘れることは出来ない。1607年にはじめて Virginia の Jamestown (現在では廃墟の村落で，歴史的名残りを留めるだけである) に上陸した Captain Smith の一行にはじまって，1620年の Mayflower 号による Pilgrim Fathers が Plymouth へ渡航して来た当時は，丁度イギリス本国では，Shakespeare や Francis Bacon, Ben Jonson 等が活発な文筆活動を続けていた頃であった (表-1 参照)。[18] 従って，初期の植民者達はその出身地によって，Shakespeare 時代の，いわゆる Elizabethan Euglish のさまざまな方言を用いていたと言える。つまりこの時点においては，American English は方言をも含めて，British English そのものであったわけである。[19]

ところが，17世紀初期のアメリカにおける各地の植民地は，地理的社会的に互いに孤立してしまっていた。交通の未発達，地形の障害，それに生活の困難と原住民である Indian の反

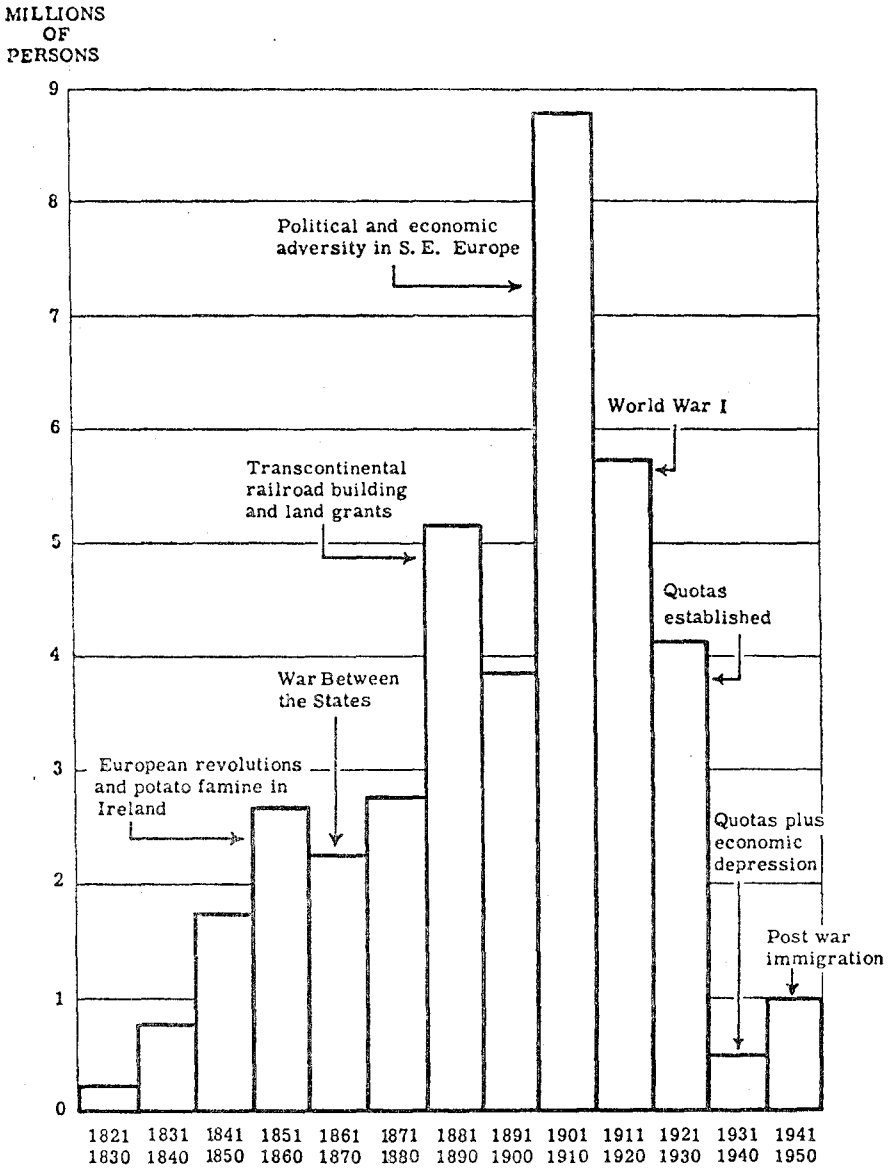
表—1



感も加わって，方言発達の温床であり主要条件の一つでもある。"isolation" を一世紀にも亘つて続けざるを得ない状態であった。アメリカ方言の成立は，このような植民地の状況と，その後も引続いて渡来した複雑な移民の歴史によって少なからず影響を受けて来たことがその大きな特色であると言える。そこではじめに，この移民の歴史を三期に分けて，それを概観してみることにしたい。[20)]

第一期は，上述の Jamestown における最初の移民から，1790 年即ちアメリカにおけるイ

表—2



ギリス植民者達が残らず Federal Constitution に賛同し，はじめての国勢調査が行なわれた年までである。その当時のアメリカの人口は約 400 万で，その中の 95 パーセントまでは Appalachian Mountains の東の太西洋岸に住み，90 パーセントは英国諸島のいろいろな地方からの移民であった。[21)]

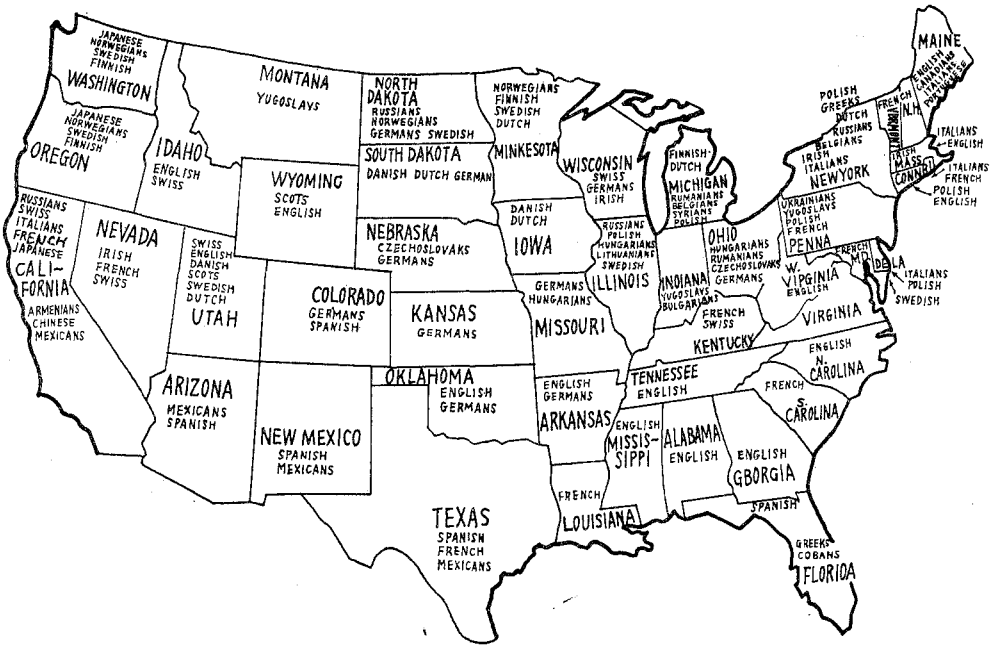
第二期は，第一期のあとアメリカ南北戦争が終った大体 1860 年頃までである。この時期

には，アメリカの住居地域は Appalachian Mountains を越えて西に延び，又南部の Carolina, Georgia にもひろがって，ついには太平洋岸にまで達するに至った。[22] 更に人種的には，アイルランドの馬鈴薯の不作とドイツにおける革命の失敗 (1848) により，アイルランド人及びドイツ人の移民が新たに加わったのがこの期間の特徴である。

南北戦争以後の第三期には，移民の種類は異って来た。前二期を通じて，更にその後も1890年頃までは，英国諸島及び北欧のチュートン民族がアメリカ移民の70パーセントから90パーセントを占めていたが，それ以後は，南欧人及びスラブ民族が続々とこれに加わって来たのである。イタリア人だけでも，第一次世界大戦前に年間30万人以上も移入し，アメリカへ流入する移民の年間総数約100万の中，東部及び南部ヨーロッパからの移民が75パーセント近くに達した (表-2参照)。[23] なおアメリカには，これら欧州民族のほかに，約1千万の黒人が主として南部と東部の大都会に住んでいたこともつけ加えなければならない。

更に又，これら移民のアメリカ国内における分散状況を示すと図-2[24] のようになるが，これは当然，方言の分布状況に対しても何らかの微妙な影響を与えているものと考えられる。

以上概観を試みたアメリカ移民の三時期の中，アメリカ方言の研究に際して最も重要なのは，言うまでもなく第一期である。アメリカ英語における方言の分布は，イギリス英語の方言をそのまま北米大陸に持込んだ第一期の植民によってその基礎がすえられ，以後の渡来者の英語もしくは，英語以外の外国語は，その出身地及び民族の如何を問わず，既存のアメリカ方言



図—2

に何らかの影響を与えつつも，自然にこれに同化されて行ったと見ることが出来よう。

けれども勿論，方言の成立のための要因は，このような移民の歴史との関聯性だけで説明しつくされるものではない。その要因を論ずるにあたって，気候の差や，各地域居住者の身体的な相違にまで言及されることがあるが，これは当らないようである。[25] ただここで，このようなアメリカにおける移民の歴史の背後にある社会的要因については，これを看過してしまうことは出来ない。例えば産業とか聚落の都市化の問題，それに教育などである。

周知の如く，アメリカ革命が起った1776年には，すでに産業革命は進行中であった。無限にひろがるとも思われた広大な沃野と豊富な天然資源，多くの自然の良港と交通路としての河川の発達，更にそれに加うるに数多くの精力的で希望に満ちた技術者達，[26] これらの諸条件は当然のことながらアメリカにおける産業革命を一層促進せしめずにはいなかった。人口の急速な増加はいきおい商品の市場性を高める。そして拡大された産業は，自然に移民達に好条件の就業の機会を保障する。かくして，人口の増加と産業の振興，国富の増大は相互に作用し合って，更に又，南ヨーロッパや東ヨーロッパからの移民を数多く招き寄せる結果になっていった。

このような産業の発達は，必然的に都市の発達を促す。事実1775年においては，英語使用国の都市の中で Philadelphia と Boston は，London に次いで，2, 3位を占める重要都市にのし上っていたのである。[27] このことも又当然に，移民の流入とともに言葉に対して影響を与える一つの factor であったと考えないわけにはいかない。

更に教育の分野においても，アメリカにおけるその普及度や一般的水準は，英国のそれに比べてさえ，決して遜色のないものであった。American Revolution を契機としてなされた Webster などに代表される linguistic nationalism の台頭は，American English の特色を British English に対照させてより明確にする作用を果したが，このことについてはここではふれない。[28] ただこのような教育の普及を背景として，American English に対する関心と自覚とが，それまで無雑作に受入れられて来た時代おくれの vocabulary や発音に対する反省を促がし，明確なアメリカ的文法体系を打出す動因になった，ということには注目しておく必要がある。

しかしながら，以上に述べて来たようないかなる要因も，単独の形で方言の成立に寄与し若しくは影響を与えるということが考えられないのは言うまでもないことであって，これも地域差があることではあるが，種々の要因は相互に交錯し，総合的に方言に影響を及ぼす力となると考えるのが妥当である。Francis は，以上に述べて来たようなことも含めて，アメリカ方言の成立要因として考えられるすべてのものを，種々の調査の結果，次のようにまとめてみた。少し長くなるが，これをこのまま引用してみよう。[29]

1. Any large or influential element in the early population of an area can be expected to contribute materially to the speech of that area, whether in pronunciation,

grammar, or vocabulary. To those aware that western Pennsylvania was originally settled in large measure from the Scots Presbyterian counties of northern Ireland, it is not surprising that one can find Ulster Scots features in western Pennsylvania speech.

2. Migrations will carry dialects along their routes. Contrasting forms of Pennsylvania and New York speech have spread across the Great Lakes States in two bands, which show far less overlapping than the mobility of the American population would lead us to expect.

3. Old political and ecclesiastical boundaries, dating from times when population movements were more restricted than now, may have brought about dialect divisions. Such boundaries often underlie speech differences in Germany (pre-Napoleonic pricipalities) or England (diocesan boundaries, relatively unchanged since the Middle Ages). In North America, where political boundaries are much younger and do little to restrict population movements, what little effect they have on dialect seems chiefly on the currency of political terms. The South Carolina (and normal U.S.) *county seat* is often the *county site* in Georgia. The chief officer of a township, the *supervisor* in New York State, is the *reeve* in Ontario; in Ontario the chief county official is the *warden*, without a counterpart in the United States.

4. Physical geography, though often overrated as an influence, is nevertheless important. A marsh may hinder communication between settlements, as in the coastal South. A desert will restrict the size or permanence of communities. A mountain range is rarely an absolute barrier, but the passes will determine the routes of migration and communication.

5. A cultural center, for whatever reason its culture is important, will exert an influence on less important communities. "Standard English," particularly the variety emulated in the British Isles, is basically the upperclass speech of the London area, which became a model to imitate when London became not only the capital of England and the residence of the court but the center of trade as well. The relationship of Chaucer to the rise of London English is often missstated; he did not give it status as a standard language, but would likely have written in it even if he had not been a native Londoner (as did a Yorkshireman like Wyclif) because the economic prestige of London had already made its speech the standard. A complex of similar forces operated to make the dialects of Paris and Florence, respectively, the basis of standard French and standard Italian. Although we have no single city dominating American economic and social life the way Paris and London dominate France and England, and though speakers outside of the tributary areas often mock the speech of a city like Boston or Charleston, yet one may detect in the speech of adjacent small-town and rural areas greater or less influence of such cities as Boston, New York, Philadelphia, Richmond, and Charleston—and probably also of San Francisco, St. Louis and New Orleans.

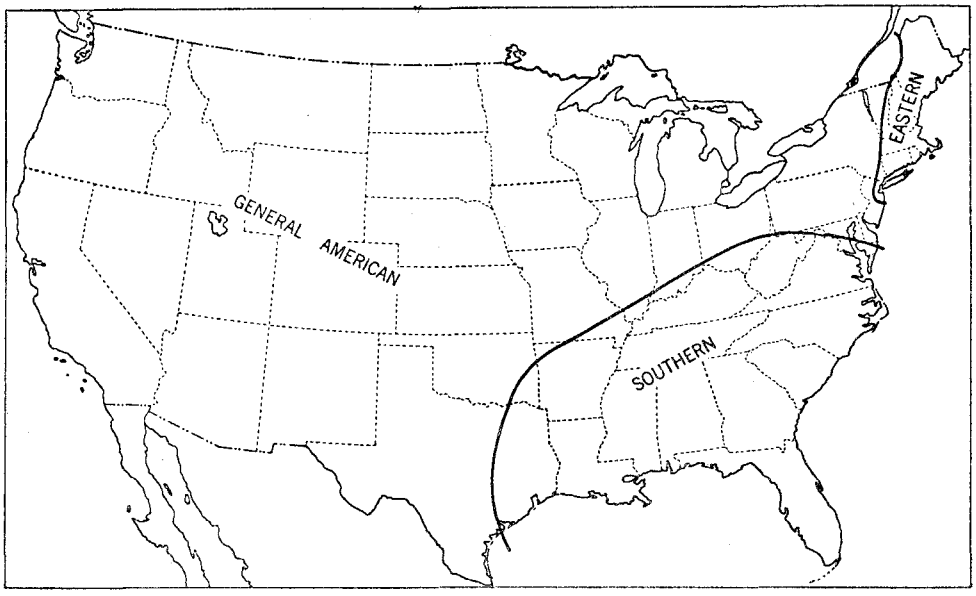
6. The dialect of an area may reflect its social structure. Are its class distinctions

relatively rigid, or relatively flexible? Are educational opportunities open to all, or are they restricted to a favored group? And, even if education is a fairly general advantage, do rich and poor, old families and newcomers, all attend the same kinds of schools?

7. Finally, the dialect may reflect the presence of a large body of new immigrants with a different linguistic and cultural background from that of the older inhabitants. Cultural innovations will lead to innovations in the vocabulary, whether by direct borrowing or by loan translation. If the foreign group is relatively large and homogeneous, it may carry over its habits of pronunciation and grammar into English; or the way in which it approaches English may affect the linguistic attitudes of the whole community.

このようなさまざまな要因を含んで成立しているアメリカ方言は，19世紀に入る頃までにすでに一般的にひろくその存在を認められるようになっていた。[30] 演劇の台詞の中にも方言が取入れられたり，Webster の *Blue-Backed Speller* があらわれて以来，各地で作り出された Spelling book にも地域的な発音の相違が脚注につけられたりし始める。[31] そして20世紀初頭には，教科書の編纂者や方言の研究者達によって，アメリカにおける方言は大体次の3つに区分されるまでになったのである（図-3参照)。[32]

1. Eastern 又は New England 方言
2. 南部方言 (Southern)
3. 一般アメリカ方言 (General American)



図—3 The three major regional speech areas, as noted before the 1940's.

4. 方言の調査

アメリカにおける最も初期の方言調査は，1891年に発表された O. F. Emerson の *The Ithaca Dialect* が基礎になっていたようであるが，これは当時の，ドイツやフランスなどにおける方言研究に比べると，研究方法においても組織的な研究基盤の点でも，幼稚なものでしかなかった。例えば，1889年に発足した American Dialect Society は，先ず最初の仕事として，英国における Joseph Wright の *English Dialect Dectionary* (1895–1905) をモデルにし，これに比肩出来るような American Dialect Dictionary の編纂を目標にかかげたが，当時の研究態勢では殆んど計画だけで，実現には程遠いものであったらしい。

ところが，ドイツの言語地図をはじめとして，フランスやイタリアのものまで出るに及んで，[33] アメリカでも急速に言語地図作成の気運が盛上り，1930年には American Council of Learned Societies を sponsor として，ミシガン大学の Hans Kurath 教授をリーダーとする研究計画が作り上げられた。Kurath 教授自身は，1931年から，太西洋沿岸各地の言語習慣の記録に当ったが，これがアメリカにおける科学的な方言研究としては，最初のものであるといえる。[34]

このアメリカの言語地図の作成方法は，上述の各国の方法に学んだものではあるが，アメリカ独特の現象とも言うべき地域的社会的移動性や，非英語国民の流入，更には言語の歴史が新らしいために，ヨーロッパ主要国語に見られるような prestige dialect に欠けていたというようなことなども考慮されなければならなかった。つまり前章で見て来たようなアメリカの方言分布の特殊事情が，アメリカ的な調査研究法を生み出させたということになるのである。その調査研究は大体次のような要領で行なわれた。[35]

1. 各地方毎に，精密調査のための地域社会の network が先ずえらび出される。その選択は，経済的文化的な面でのその地方の歴史をよく調査した上でなされ，この際に，その地域全体を均等に代表するような抽出方法が用いられることは勿論，それと同時に，その地域社会特有の諸条件も考慮に入れられなければならない。[36] 諸条件とは例えば，その地域が初期の植民地であったかどうか，移民や交易のルートに位置してはいないか，過去又は現在においてその地方の経済的文化的中心であったかどうか，昔に比べてその地域が著しく衰微しているようなことはないか，孤立しているような環境で古いしきたりや風習がそのまま残っているようなことはないか，過去においてその地域で外国語が話されたことはないか，その地域の住民の大多数がヨーロッパからの集団的移民の子孫で占められているかどうか，といったようなことがらである。

2. よく訓練された調査員が実地に調査を行なってデータを集める。調査員には特別の教育を施して，言語学，音声学，音素論等のほか担当地域の歴史や文化の十分な知識を身につけ

させ，同時に，どのような種類の人々を対象にしても調査活動が正確に行なえるような能力を習得せしめる。[37]

3. データは，発音，文法，語いの3つの部分から成る質問紙を用いて集められる。この質問紙に書込まれる質問事項については，言語地図作成の staff 達によって次のような3つの原則が打立てられた。a) 質問内容は，調査地域の殆んどの人々にとってよく知られているような普遍的な事項に限ること。b) 日常会話にふだん取上げられているような平易な事項について質問すること。c) 地域的或いは社会的相違が見出し易いような項目をえらぶこと。

質問項目は地域により，社会的文化的背景の相違を考慮して，500 程度から 800 くらいまでで同数でなくともよい。質問の様式も，対象地域に即応して変化をもたせる。質問項目の内容は，調査地域の人々が興味を持っていると思われるあらゆる事項を包含するのが理想的であるので，[38] 時間や資金，それに資料提供者側の協力態度に制約があるとしてもなるべく理想に近づける。

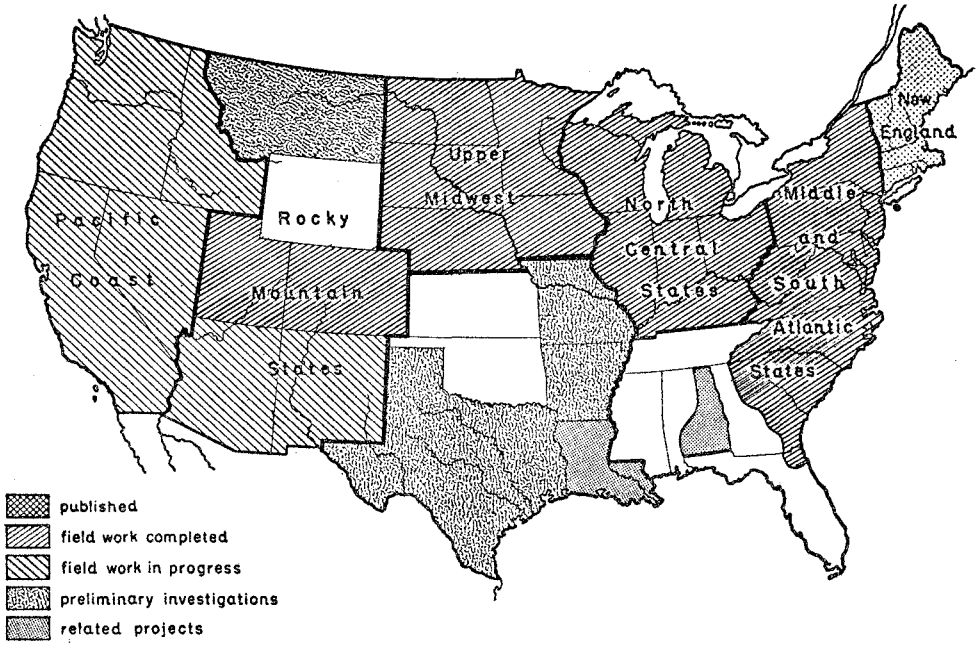
4. 資料提供者として代表的な資格を持つと思われる人物，調査地域で生れ育った常住者，特定グループの長等が調査の対象としてえらばれる。調査の対象が，老人や無教育者に偏してはならないのは勿論である。従って，いかなる地域においても，少なくとも2人以上の調査対象者と面接する。そして例えば2人だけの場合，その中の1人は，その地域に最も古くから住んでいる老人で，教育程度は低くて旅行や読書も最少限度に留まっているような人，他の1人は，高校卒業程度の教育を受け，その地域外との接触も比較的多い中年の人，というようなえらび方が望ましい。

5. 現地での調査結果はその場でこまかく音標記号で記録され，音素の比較対照も面接中に注意深く行なわれる。言語上の微妙な相違は，調査員の主観が大きく作用するように考えられそうであるが，共通の方式でよく訓練された調査員であれば，調査結果は誰が担当してもほぼ同じであることが立証されている。テープレコーダーのような調査器具は非常に有用なものには違いないが，実際の調査の雰囲気の中では，よく訓練された調査員の耳には及ばない。[39]

6. 面接調査は，日常会話の際の雰囲気を損なわないようにして行なわれる。心理的に緊張したり，自己の使用する言葉が間違っているかも知れないことを恐れるような気持が働らいていては正確なデータは取れない。特に文法的な用法に関するデータの採取には，打ちくつろいだ話し合いの際の雰囲気が必要である。

以上のような要領で行なわれた面接調査は，言語地図作成が決定されて以来，25年間の中に約3千人分を終了した。次に示す 図-4は，このような調査活動の進行状況を，1956年現在であらわしたものである。[40]

この図に示されているように，New England 地方は方言調査の完了している唯一の地域である。この地方の実地調査は，Kurath 教授を中心に 1931 年に開始して 1933 年に完成，1939



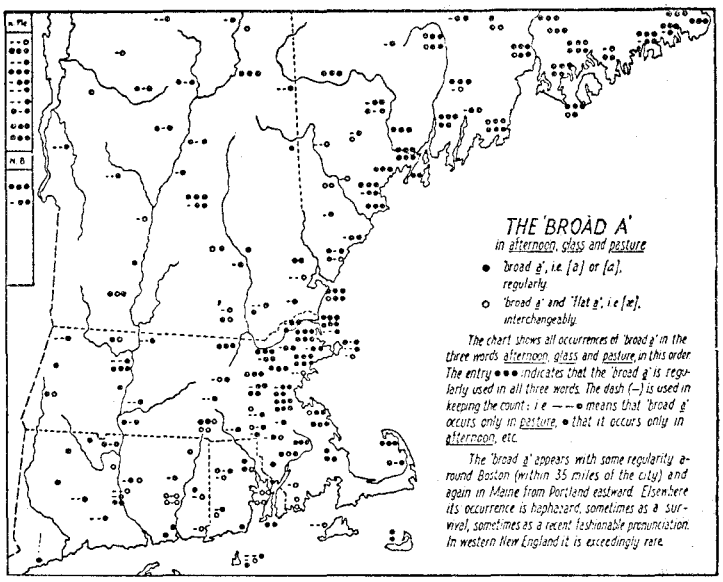
図—4 **Progress of the American Atlases**

年には同教授の編集で *Handbook of the Linguistic Geography of New England* の第一巻が出版され，1943 年には全巻の出版が完成した。その内容は約 600 の地図の集合から成り，それぞれの地図は，図-5, 6, 7[41] に示されているように，或る一つの言語特色の行きわたっている全地域の分布状況を示している。

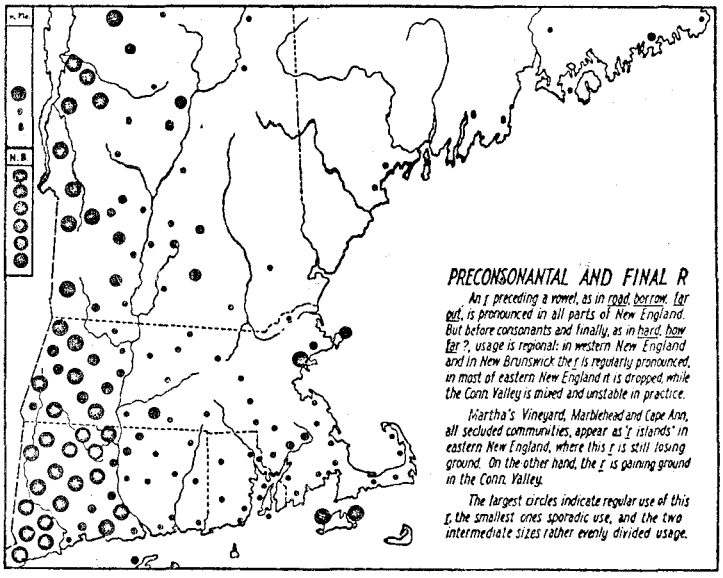
New England 地方の次に調査が着手されたのは，中部太西洋沿岸と南部太西洋沿岸であった。この地方の実地調査は，New England 地方の主任調査員であった Guy S. Lowman, Jr. が 1933 年から担当したが，彼は 1941 年に死亡したので，そのあとは R. I. McDavid, Jr. に引継がれた。彼は第二次世界大戦中には調査を中断せざるを得なかったが，その後 1949 年に実地調査を完了している。[42]

中北部 (North-Central) の各州についての調査は，Michigan 大学の H. Marckwardt 教授の下に，1938 年に始められた。これは，いわゆる一般アメリカ語 (General American) の地域内にも，方言の相違が見られるかどうかを調べるためのテストケースでもあったが，実地調査の結果この相違がはっきり認められ，改めて地域別に，方言調査の計画が樹て直された。しかし，第二次世界大戦終結前に完成したのは，Frederic G. Cassidy による Wisconsin 州だけにとどまり，戦後，1948 年から再び実地調査が始められている。

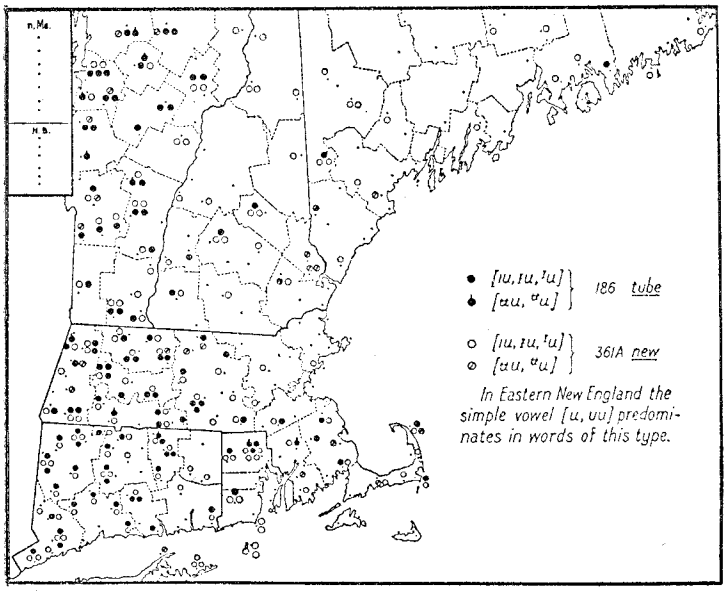
中西部上方 (Upper Midwest) 地域の調査は，Minnesota 大学の Harold B. Allen が中心となって 1947 年に開始された。Allen 教授は殆んど独力で，Minnesota, Iowa, South Dakota,



図—5 The "Broad A" in New England



図—6 The New England pronunciation of preconsonantal and final R.



図—7 The New England pronunciation of tube and new.

North Dakota, それに Nebraska の各州を含む地域の調査記録を 1957 年に完成させ，なおその上に，1,000 以上に上る，語いの調査表を作り上げている。[43]

ロッキー山岳地帯 (Rocky Mountain area) の調査は，Colorado 大学の Marjorie Kimmerle 教授が指導して，1905 年から始められた。この地域の調査は，財政的にも苦労し，地理的悪条件が重なってあまり進捗を示していない。実地調査が完了したのは Colorado, Utah の両州だけで，Arizona 州はその 3 分の 2 強，New Mexico はほんの若干，Montana 州に至っては，散発的にところどころ調査が行なわれた程度である。

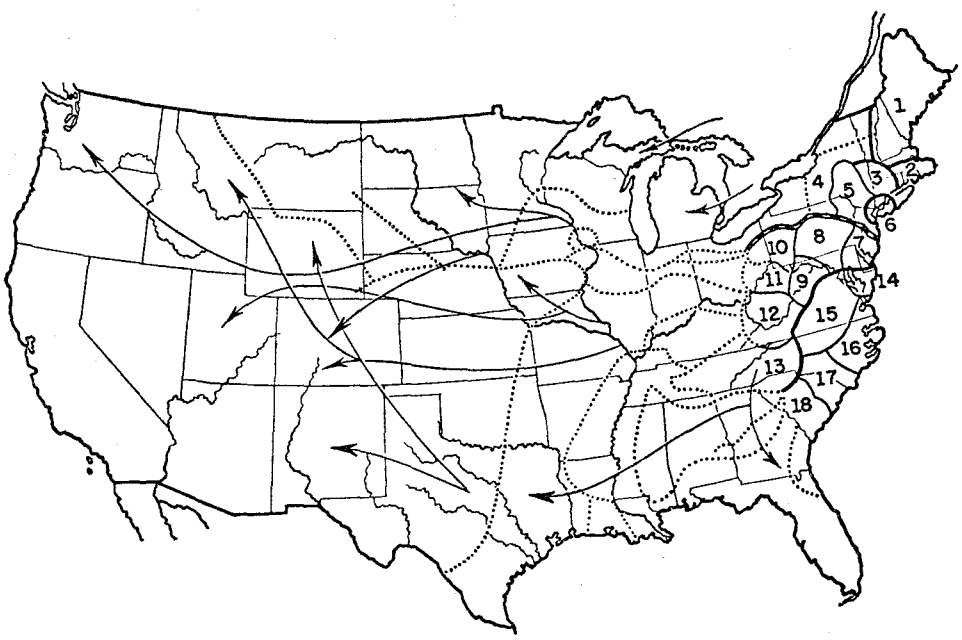
太平洋岸の調査は，開始が遅れたにもかかわらず，研究費用にも恵まれ，数人の熱練した調査員がいたおかげで速い進捗状況を示した。調査の中心になったのは，California 大学の David Reed と Washington 大学の Carrol Reed の 2 人で，U.C.L.A. (カリフオルニア大学ロスアンゼルス校) の John Moncur と Washington 州立大学の David Decamp が指導助手を勤めた。Washington, Oregon, California, Idaho, Nevada それに Montana 西部を含む地域の約 3 分の 2 以上の調査がすでに完成している。[44]

Texas を含むメキシコ湾諸州 (Gulf States) についての調査はかなり遅れていて，まだまとまった調査結果は発表されていない。Louisiana 州立大学の C. M. Wise 教授が中心となって調査を担当しているが，100 を少し越えるぐらいの実地調査が終っている程度である。

アメリカにおけるこのような方言調査と呼応して，カナダでも徐々にではあるが部分的な調査が始められるようになった。このような動きから，今後 1, 20 年の間には，アメリカとカナ

ダ全体についても，研究がすべて十分に軌道に乗ることを予想するのは必ずしも無理ではないであろう。

しかしながら，Linguistic Atlas of the United States and Canada に関する限りにおいては，完全な資料は，東海岸と Ohio 河の北で西は Mississippi までの地域についてしか得られていない現状なので，アメリカ方言の地域的な variation についても，暫定的な結論を出せるのはアメリカの東半分に限られる。例えば Kurath 教授は，New England の言語地図作成のための蒐集データを基礎にして，1949 年に *Word Geography of the Eastern States* を出版したが，この中で示されている主要方言地域は，次の 図-8[45] のように局限されている。(矢印はアメリカへ来た移民の移動方向，点線は予想される方言分布の境界を示す。)



図—8

THE NORTH

1. Northeastern New England
2. Southeastern New England
3. Southwestern New England
4. Inland North (Western Vermont, Upstate New York & derivatives)
5. The Hudson Valley
6. Metropolitan New York

THE MIDLAND

North Midland

7. Delaware Valley (Philadelphia)
8. Susquehanna Valley
10. Upper Ohio Valley (Pittsburgh)
11. Northern West Viginia

South Midland

9. Upper Potomac & Shenandoah
12. Southern West Virginia & Eastern Kentucky
13. Western Carolina & Eastern Tennessee

THE SOUTH

14. Delmarva (Eastern Shore)
15. The Viginia Piedmont
16. Northeastern North Carolina (Albemarle Sound & Neuse Valley)
17. Cape Feat & Peedee Valleys
18. The South Carolina Low Country (Charleston)

この地図上の3つの主要な方言の境界線は，アメリカを横断し，Kurath 教授はこれらをそれぞれ北部 (Northern)，中部 (Midland)，南部 (Southern) と呼んだ。

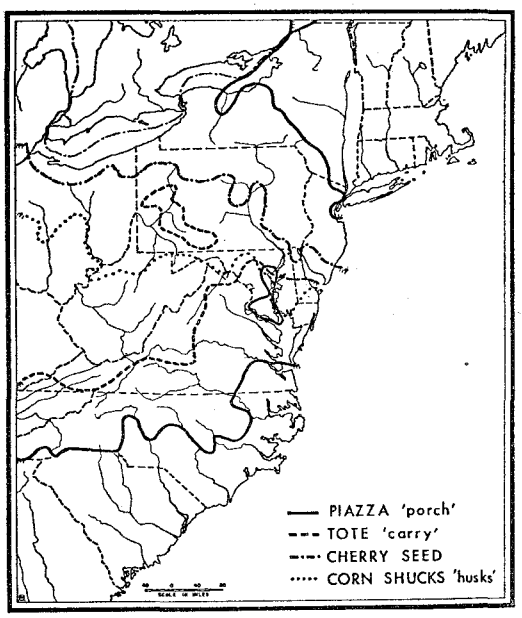
北部と南部地域とを区切る線は，Sandy Hook のやや南の New Jersey に始まり，北西に向って Pennsylvania の Susquehanna 河の東支流に達し，それからは北部層のすぐ南の Pennsylvania を通って西へ行く。Ohio ではこの境界線は Western Reserve の南に進んでから又北西に向い，Indiana の Fort Wayne の上を通る。更にこの線が South Bend に接近するとやや南西に下降し，Illinois を通って Quincy のやや北の Mississippi 河に到達する。

南部と中部地域とを区切るもう一つの重要な境界線は，Delaware 州，Dover のやや南の地点から始まり，いくらか弧形を描いて Baltimore を通り抜け，Potomac 河の北の所で急に南西に曲る。それから更に，Virginia の Blue Ridge 山脈の峰に沿って James 河の南部に至り，そこから North Carolina 高原へ向きを変える。South Carolina や Georgia の南部附辺では，この境界線はどのように伸びるか，未だ明らかにされていない。[46]

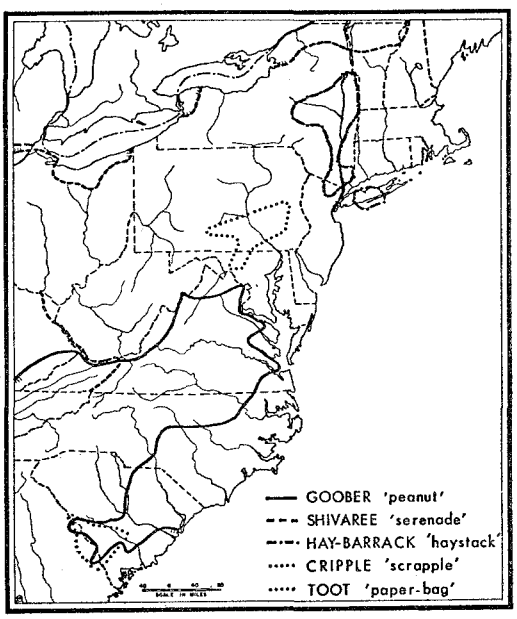
このような Kurath 教授達の調査結果は勿論，完全に正確なものであるとは言えないであろうが，それでも，すでに示した図-3にあらわされているような地域的分布の考え方をかなり修正することになった。それまでは単純に，New England 方言とか南部方言とか呼ばれて来たものも，調査の結果が明らかになってみれば，そのおのおのが一つの主要な方言としてみなされるには，あまりにも多種多様であり，一様性に欠けていることが明らかにされたのである。

しかしここで述べておかなければならないことは，このような境界線を決定するに当って Kurath 教授は，その著書の題名が示すように，発音や文法などよりも，どちらかと言えば，語いに重点をおいて方言の分布を考えていることである。そして又，改めて注意しなければならないことは，そのような Kurath の境界線そのものが，所詮，方言の分布を最大公約数的にまとめて，例外と矛盾を常に含んでいることを前提に，引かれた大まかな線でしかあり得ないということである。

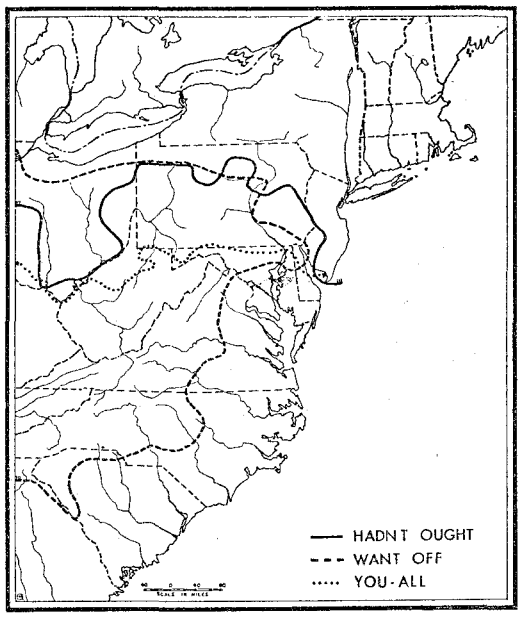
より厳密な意味では，例えば発音の分布範囲を示した境界線と，語いや文法的用法の分布範囲を示した境界線とは，必らずしも一致するとは限らず，それ故に，一地方の一方言の名のもとに，これらを一まとめにして論ずることは，或程度の正確さを犠牲にした上でなければ出来ない。したがって，より正確な方言の分布状況を見て行くためには，或る特定の語，特定の発音，或いは特定の文法的表現の一つ一つについて，その分布状況を isogloss (等語線)[47] で示すことが考えられなければならないであろう。アメリカにおける言語地図の作製も，このような isogloss の調査がその基礎になっているのであって，[48] 次の図-9,[49] 10,[50] 11,[51] 12[52] の各図は，このような調査によって明らかにされた，語い，借用語，文法，発音のそれぞれにおける若干の例を示したものである。



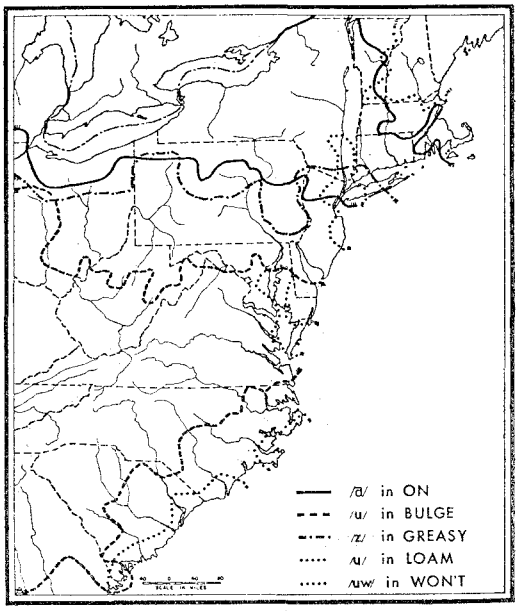
図—9 Vocabulary Isoglosses



図—10 Loanword Isoglosses



図—11 Grammatical Isoglosses

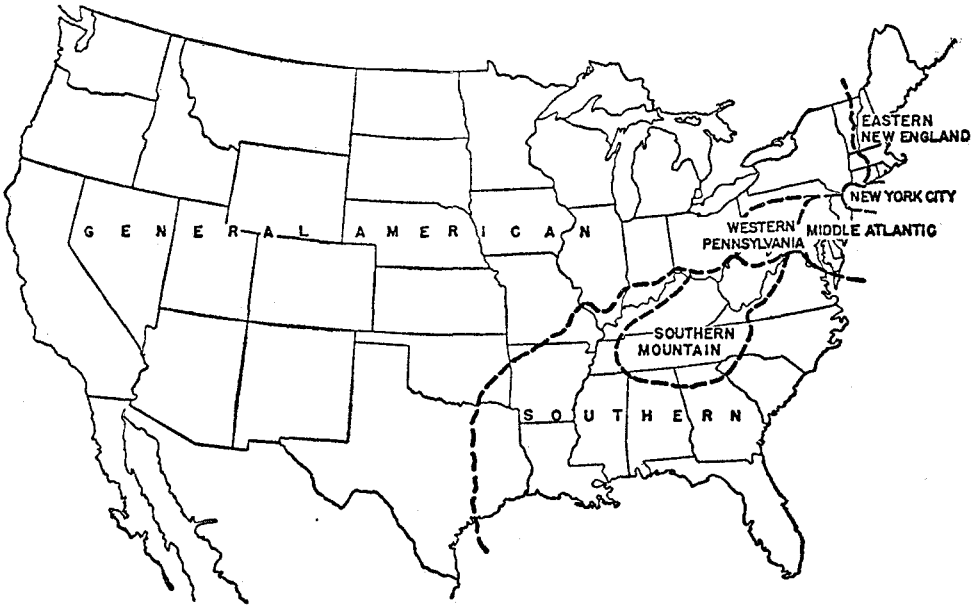


図—12 Pronunciation Isoglosses

5. 方言の地域差

すでに見て来たように，Linguistic Atlas of the United States and Canada は未だ完成されておらず，くわしい調査研究が行なわれた地域も限定されているので，方言の地域的相違を，アメリカ全土の規模で述べることはむずかしい。しかし，発音だけに重点をおいてその相違を取上げたものとしては Mencken の研究があり，彼はその大著 *The American Language* の中で，アメリカ各州の発音の特徴を詳細に述べている。[53] 一方，Thomas も又，独自の立場から一応アメリカ全土にわたる方言分布の調査を発音を中心にして行ない，その結果，1947 年の *An Introduction of the Phonetics of American English* では，方言分布の区分を，図-13[54] のように，7 つに分けてあらわした。

前章の終りで述べた，正確さに対する制約ということも一応十分に意識しながら，ここでは先ず，この Thomas の研究を基礎にして，この 7 つの地域における発音の相違をとりあげてみることにしたい。[55]



図—13

New England 東部[56]

この地方で先ず目立つのは [r] の発音である。*far* を [fa:], *farm* を [fa:m] と発音するように，語尾と子音の前の [r] は発音されず，この点ではイギリス英語の発音に近い。*fierce* は [fIəs], *scarce* は [skɛəs] となって [r] は [ə] の発音におきかえられる (図-6 参照)。

murmur, *perverse* のような語では，それぞれ [mɜmə], [pəvɜs] となって，普通用いられ

ている [ɝ], [ər] の発音は, [ɜ], [ə] にかわってしまう。ただし, linking [r] (連結的 [r]) としての [r] の発音は残され, *far away* は [far əwe] となり, *better and better* は [bɛtər ən bɛtə] となる。*law* が [lɔr] となり, *ideas* が [aIdiərz] となるように, しばしば intrusive [r] (嵌入的 [r]) が入ることもある。

cart と *cot* については, これらをそれぞれ, [kɑ:t], [kɒt] と発音して両者の区別をはっきりつけるのもこの地域の特色であるが, *cot* と *caught* については, 両方とも同じく [kɒt] で区別はない。

forest, orange, horrid のような語を発音する場合には, *o* を [ɑ] と発音することが圧倒的に多い。*ask, dance, path* などでは [a] がしばしば用いられ, [ɑ] の発音は, *log, mock, gong, honk, donkey* 等において普通である。*doll, involve* の場合にも [ɒ] や [ɔ] が用いられることがあるが, [ɑ] の方が一般的のようである (図-5 参照)。

二重母音の [aI], [ɔI], [ɑʊ] については, 比較的統一された発音の仕方が見られる。*tune, due, news* などの語については, 時折 [ju] の発音が見られ, *absorb, blouse, greasy* にも時折 [z] が用いられることがあるようである。

New York 市附辺

この地域でも, *far, farm* は [fɑ:], [fɑ:m] となって, 語尾と子音の前の [r] は発音されないことが多い。*fierce, scarce* においては, [r] は [ə] におきかえられるか, 或いは全く無視されて, [fɪəs] 又は[fɪ:s], [skɛəs] 又は [skɛ:s] となる。

murmur, perverse については, [ɝ] は [ɜ] 又は [ɜI] と入れかわり, [ər] は [ə] となって [mɜmə] 又は [mɜImə], [pəvɜs] 又は [pəvɜIs] というような発音がなされる。

linking [r] は *far away* [far əwe] のような場合におこり, *better and better* のような場合にも [bɛtər ən bɛtə] となって linking [ər] が生ずる。*law* が [lɔr] となり, *ideas* が [aIdiərz] となって, intrusive [r] が入るのも, New England の場合と同様である。

cart と *cot* の発音については, しばしば *cart* の母音をのばして [kɑ:t] とすることにより *cot* [kɑt] の発音と区別するが, *cot* の方も [kɑ:t] と発音されることがあるので, この場合には

両者の区別はつかない。

forest, orange, horrid の発音では，母音はすべて [ɑ] である。*hurry* の場合はすべて [hʌri] となり，*carry* は [kæri] となって，この点については殆んど例外はなくはっきりしている。

four と *for* はどちらも [fɔə] が普通で，[fɔr] という発音もまれには聞かれる。*ask, dance, path* の場合は [æ] が用いられるが，*bad, land, thanks* などの場合のように [ɑ] が用いられることもあるので，この [ɑ] と [æ] については，New England 東部におけるようなはっきりした区別はない。

log, mock, gong については [ɑ] の発音が殆んどである。*donky* では古い形の[ʌ] を用いることの方が，[ɑ] よりもやや多く，*honk* では [ɑ] が普通で時たま [ʌ] が用いられる程度である。

nice, time などにおける二重母音は [aɪ] と発音されるが，[ɑɪ] の発音も珍らしくはない。*boil* と *noise* のような場合，[ɔɪ] の代りに [ɜɪ] と発音されるようなことはあまり一般的ではなく，特徴として目立つ程ではない。*out* と *town* では [aʊ] が一番多く，[æʊ] もかなり用いられるが，[ɑʊ] はまれである。

tune, due, news については，時々 [ju] が聞かれる。*absorb, blouse, greasy* の場合も時々 [z] が用いられていることがあるようである。

中部大西洋沿岸 (Middle Atlantic)

この地域は東海岸唯一の地域として，[ɝ] [ɚ] 及び語尾と子音前の [r] が常に発音される。この点については，General American の発音と区別はつかない。*cart* は [kɑrt] となり，*cot* は [kɑt] と発音されて，これも G. A. と同じであるが，G. A. と異なるところは，時折 *cart* [kɒrt] のような発音も聞かれることである。

forest, orange, horrid における母音は [ɑ] が最も普通であり，*hurry, carry* は，東海岸特有の [hʌri], [kæri] が用いられる。*four* については，[for] となったり [fɔr] となったりして一定していない。

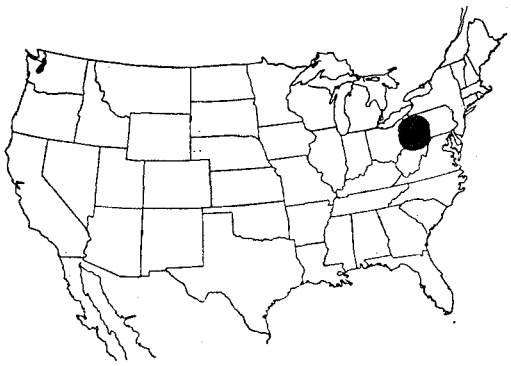
ask, dance, path の母音は，G. A. や南部方言のように [æ] を用いる。*log* の母音は Philadelphia から New Jersey の南部にかけては [ɑ] が用いられ，Baltimore や Washington 地区では [ɔ] が多い。*gong* の母音は普通 [ɑ] で，*mock, doll, involve* などの場合は殆んど例外なく [ɑ] となる。*donkey* については [ʌ] が殆んどであるが，[ɑ] の発音もまれではない。*honk* の場合は [ɑ] が普通，ただし [ʌ] の発音も時折聞かれる。

二重母音の [aɪ] は New York 州のように [ɑɪ] と発音されることもあり，*choice* などでは [tʃoɪs] と発音されるように，しばしば [ɔɪ] は [oɪ] となる。*out, town* の発音は New York とかわらず [aʊ] が標準的，しかし，[æʊ] もまれではなく，[ɑʊ] と発音されることもある。

tune, due, news の場合は [ju] よりも [u] を用いる傾向が強い。*absorb, blouse, greasy* の発音で [z] がしばしば聞かれるのもこの地方の特徴である (図-12 参照)。

Pennsylvania 西部

この地域では，[ɝ], [ɚ] 及び語尾と子音の前の [r] は発音される。*log, forest, orange, horrid* の場合は [ɔ] が普通で，*four, mourn, hoarse* などでは [or] と [ɔr] 二通りの発音が用いられる。*ask, dance, path* の時の母音は [æ] で，これらの語については G. A. と全くかわらない。しかし *cot* と *caught* の発音に関しては New England 東部の発音にやや近い。普通にはこの両方に [ɒ] が用いられるが，[ɑ] や [ɔ] が同じくこの両語に用いられる点はこの地域の特徴である。

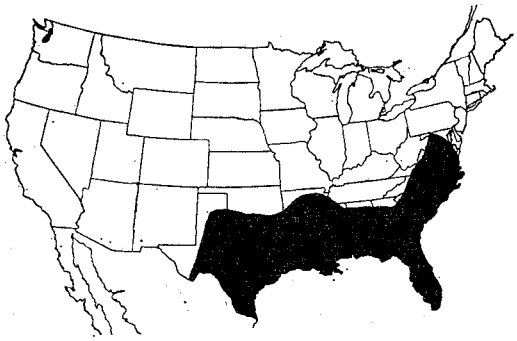


hurry と *carry* はそれぞれ [hʌri], [kæri] となって，G. A. よりもむしろ海岸地方の発音に近い。*doll, solve, involve* については，この地域では [ɔ] の発音が非常に多く用いられるのが他の地域には見られぬ特色である。*donkey* の発音では中部太西洋沿岸地帯に比べて [ʌ] がやや少なく，[ɔ] の方がかなり多い。

二重母音の [aɪ], [ɔɪ], [ɑʊ] については，G. A. の場合のように比較的一定している。*tune, due, news* についても，G. A. のように [u] が用いられるが，*absorb, blouse, greasy* では [z] よりも [s] の方が一般的である。

南　　部

G. A. で発音される [ɝ] [ɚ] はこの地域では普通 [ɜ] [ə] となる。最南部地域では，[ɜ] は子音があとに続く場合に限って [ɜɪ] と二重母音化することもある。語尾と子音の前の [r] は発音されず，又母音間の [r] も発音されないことがある。従って，このような場合 *very* は [vɛ:ɪ] となるのが普通である。



far away は普通 [fɑ:əwe] で linking [r] は生ずることなく，*law* は [lɔ] で，intrusive [r] が入ることはまれである。*cart, cot, caught*

はそれぞれ [kɑ:t], [kɑt], [kɔt] となって，この三者の区別は困難ではない。

forest, orange, horrid の発音では，一般的に海岸地方と同様の [ɑ] が用いられる。*hurry* や *carry* についても海岸地方のように [hʌri], [kæri] と発音されるのが普通である。*four, mourn, hoarse* については New England 東部のように [oə] と発音されることもあるが，南部独特の発音として [o:] も同じく用いられる。

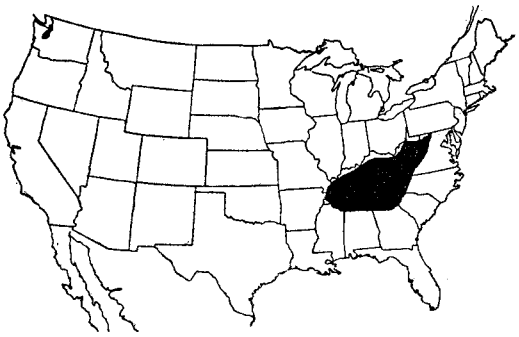
ask, dance, path などでは [æ] が普通であるが，Virginia 東部では [ɑ] の発音の残っているところもある。*log, mock* の母音は普通 [ɔ] を用い，*donkey, gong* では [ɑ] と [ɔ] の両方の発音が聞かれる。*doll, involve* では [ɑ] が普通で，[ɔ] はめったに用いられることがない。

二重母音の [aɪ] と [ɔɪ] は単母音化して発音される傾向が強い。例えば *fine* は単に [fa:n] となり，*oil* は [ɔ:l] という風に発音される。*out* と *town* については，[aʊ] が普通で，[æʊ] もしばしば用いられることがある。しかし [ɑʊ] と発音されることはめったにない。

tune, due, news はそれぞれ [tjun], [dju], [njuz] となって，[t], [d], [n] のあとに [j] の発音が加わるのが普通である。*absorb, desolate, greasy* で [z] の発音が用いられることは，G.A. の場合よりも多い。

南部山岳地帯 (Southern Mountain)[57]

Pennsylvania の場合と同様，この地域では [r] [ɝ] 及び [ɚ] の発音が用いられる。*cart, cot, caught* は G.A. と同様，[kɑrt], [kɑt], [kɔt] と区別して発音されるが，いずれの語についても [ɒ] が用いられる例がまれではない。



forest, horrid, orange については [ɑ] も [ɔ] も同様に聞かれる。*hurry* は普通 [hʌrɪ] で，*carry* は，殆んど例外なしに [kærɪ] となる。

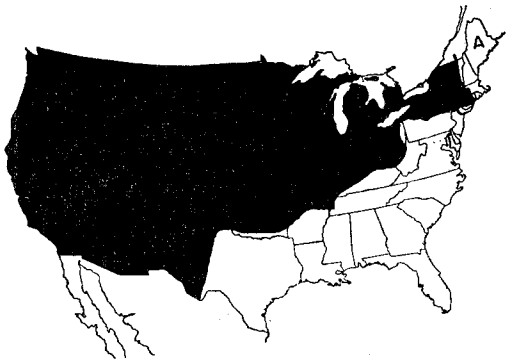
tour, mourn, hoarse の発音では [or] が用いられ，[ɔr] を用いる *for, morn, horse* とはっきり区別がつけられる。*ask, dance, path* では [æ] が普通で，*log, mock, donkey, gong* では [ɔ] が普通である。*doll, involve* の場合には，[ɔ] よりも [ɑ] と発音される方が多い。

二重母音の [aɪ], [ɔɪ], [ɑʊ] は，普通 [a:], [ɔ:] と発音され，南部低地帯では，[aʊ] 又は [æʊ] と発音される。[t], [d], [n] のあとの [j] もこの地域では一般的で，*absorb, desolate, greasy* における [z] も，この地域ではしばしば聞かれる発音である。

一般アメリカ方言 (General American)

[ɝ], [ɚ] 及び語尾，子音前の [r] が発音されることは普通で，*murmur, far, farm* はそれぞれ，[mɝmɚ], [fɑr], [fɑrm] となる。*cart* [kɑrt] と *cot* [kɑt] は [r] の有無で区別され，*caught*

は [kɔt] と発音されるから，これら3つの発音には混同は起らない。

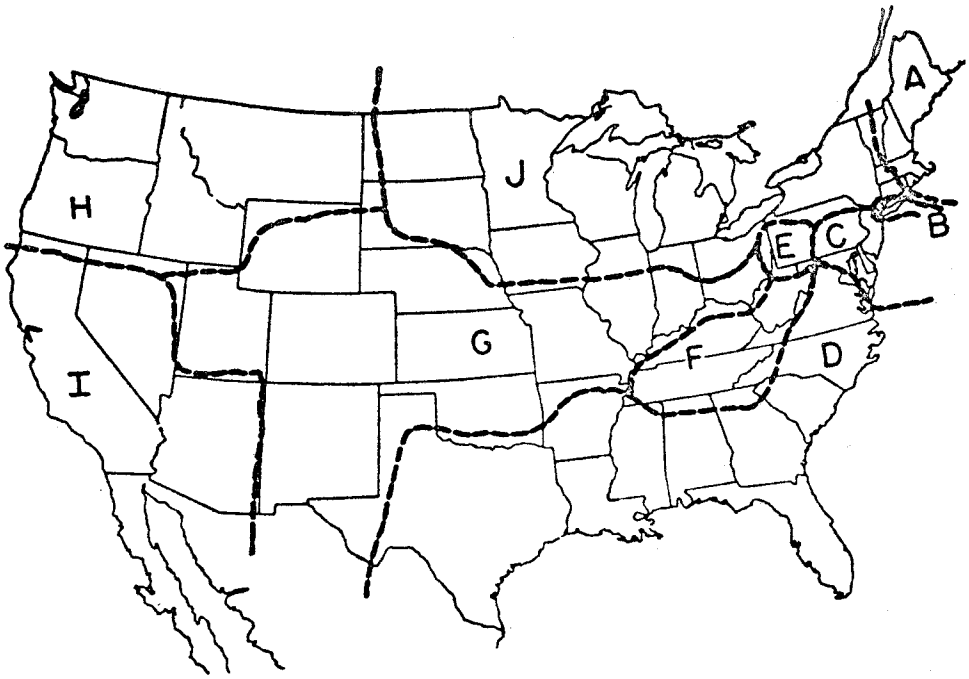


forest, horrid, orange の母音は普通 [ɔ] であり，*hurry* は [hɜri] 又は [hɝi] である。*carry* は [kæri] 又は [kɛri] となり，*four, mourn, hoarse* の場合は，[or] 又は [ɔr] が用いられる。

log, gong, honk, donkey の母音は [ɔ] が一般的であるが [ɒ] や [ɑ] が用いられることもある。*mock, doll, solve, involve* では [ɑ] が普通で，[ɔ] も用いられないこともないが，Pennsylvania 西部の場合に比べると少ない。

ask, dance, path では殆んど例外なく [æ] が用いられる。二重母音の [aɪ], [ɔɪ] 及び [aʊ] の発音は，南部に近い地方を除いては，普通一定していて変化はみられない。

tune, due, news などは [tun], [du], [nuz] となって [j] の発音は [t], [d], [n] のあとには入らない。



図—14 **The ten major regional speech areas**: A: Eastern New England; B: New York City; C: Middle Atlantic; D: Southern; E: Western Pennsylvania; F: Southern Mountain; G: Central Midland; H: Northwest; I: Southwest; J: North Central.

表—3

Word	*Eastern New England*	*New York City*	*Coastal Midland*	*South*	*Northern Middle West*
far, barn, poor, third	[fa: ba:n, puə, θɜ:d]	[faə, ba:n, puə, θɜ:d] frequently, though not universally; others say [faɚ, baɚn, puɚ, θɚd]	[faɚ, baɚn, puɚ, θɚd]	[fa:, faə, ba:n, baən, puə, θɜ:d]. [ɜ] is occasionally diphthongized to [ɜɪ] before consonants: [θɜɪd, bɜɪd]	[faɚ, baɚn, puɚ, θɚd]
park, farm	[pa:k, paək, fa:m, faəm]	[pa:k, paək, paɚk; fa:m, faəm, faɚm], loss of postvowel [r] frequent although not universal	[paɚk, faɚm]	[pa:k, paək, fa:m, faəm]	[paɚk, faɚm]
orange, foreign	[ɑrɪndʒ, fɑrɪn] predominantly; also [ɒrɪndʒ, ɔrɪndʒ, fɒ-, fɔrɪn] esp. in more western sections	[ɑrɪndʒ, fɑrɪn]	[ɑrɪndʒ, fɑrɪn]	[ɑrɪndʒ, fɑrɪn] predominantly; also [ɒrɪndʒ] and [ɔrɪndʒ]	[ɔrɪndʒ, fɔrɪn] and occasionally [ɑrɪndʒ, fɑrɪn]
greasy	[grisɪ]	[grisi]	[grisi] in northern section, [grizi] in southern section	[grizɪ]	[grisi]
tune, duty	[tun, dutɪ], sometimes [tɪun, tjun] and [dɪutɪ, djutɪ]	[tɪun], often [tun], occasionally [tjun]	[tɪun]; sometimes [tjun, tun]	[tjun, tɪun]; occasionally [tun]	[tun, tɪun; duti, dɪuti]
hog, frog, dog	[hɑg, frɑg]; also [hɒg] and [frɒg]; [dɔg]	[hɑg, frɑg]; occasionally [hɒg, frɒg]; [dɔg]	[hɑg, frɑg] in the northern midland sections, with common use of [hɔg, frɔg] in more southern sections, as in Delaware, Maryland; [dɔg]	[hɔg, frɔg]; [dɔg]	[hɔg, frɔg]; also [hɑg, frɑg]; [dɔg]
four, hoarse	[foə, hoəs]; and [fɔə, hɔəs] especially in southern sections	[fɔ, fɔə, fɔɚ; hɔ:s, hɔəs, hɔɚs]	[fɔɚ, hɔɚs] in northern sections; use of [o] as in [foɚ], etc. in southern midland and in western Pennsylvania sections	[foə, hoəs]	[foɚ, hoɚs]
ask, dance	[ask, dans]; use of [æsk, dæns] growing especially in urban areas	[æsk, dæns]	[æsk, dæns]	[æsk, dæns]; and [a-ɑsk, da-dɑns] by some in tidewater Virginia	[æsk, dæns]

Word	*Eastern New England*	*New York City*	*Central Midland*	*South*	*Northern Middle West*
worry, courage	[wʌri, kʌrɪdʒ]	[wʌri, kʌrɪdʒ]	[wʌri, kʌrɪdʒ]	[wʌrɪ, kʌrɪdʒ]	[wɔri, wɔ̃i, kɔrɪdʒ, kɔ̃ɪdʒ]
when, where	[ʍɛn, ʍɛə]; [wɛn, wɛə] in larger urban areas	[wɛn, wɛə-ɚ]	frequently [wɛn, wɛɚ]; also [ʍɛn, ʍɛɚ]	[ʍɛn, ʍɛə] with growing use of [wɛn, wɛɔ] in larger urban areas	same as South
nice, blind	[naɪs-naɪs, blaɪnd-blaɪnd]	[naɪs-naɪs, blaɪnd-blaɪnd]	[naɪs-naɪs, blaɪnd-blaɪnd]	[naˑs, naᵊs, naɪs; blaɪnd, blaˑᵊnd, blaɪnd]; [ɔɪ] before voiceless consonants, as in *nice*, and [aˑᵊ, aˑɪ] before voiced consonants as in *nine* in eastern Va. (and Ontario, Canada)	[naɪs-naɪs, blaɪnd, blaɪnd]

もっとも，Thomas もその後の調査の結果，Kurath の言語地図のための調査の時と同じように，この General American の中にも更に地域差があるのを認めていることをここにつけ加えておかねばならないであろう。[58] 1958年の改訂版では，彼は更にこの General American を4つに区分し，アメリカ全土の方言区域を図-14[59] のように，10に区分し直している。

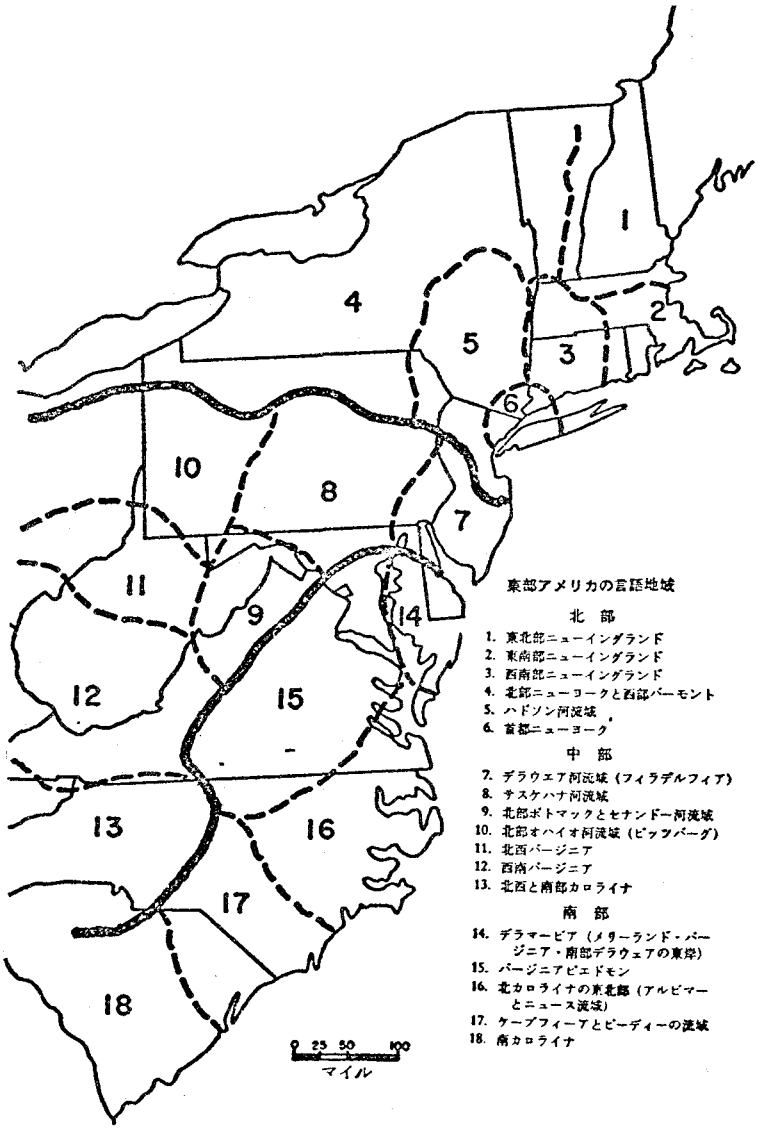
もとよりこれは，Thomas 自身の，発音を基礎にしての調査結果によるものであるから，Kurath のどちらかといえば語いに重点をおいたと見られる言語地図の調査の場合の方言分布の境界線とは，微妙な喰違いが生じていることは否めない。しかし少なくとも概観的には，すでに明らかにされた範囲内での境界線の引きかたに，かなりの相似が見出されることも事実である。恐らく調査がもっと進むにつれて，地域差は更に複雑な形で露呈されて来るであろうが，同時に，方言分布区域を細分化しようとすればする程，多くの例外と矛盾が錯綜して，境界線の決定に困難性が増してくるであろうことは想像に難くない。

Bronstein も，このような方言区分の困難性に言及しながらも，最大公約数的に発音の相違を認知出来る例として，New England 東部，New York 市，中部大西洋岸地帯，南部，中西部北方の五地域を選定し，その発音の相違を表にあらわしてみた。すでに概観を試みた Thomas の発音上の地域区分との比較対照とまとめの意味で，ここに掲げたのがその表である（表-3参照）。[60]

次にもう一度，Kurath 等の言語地図のための調査による方言分布に立戻ろう。すでに述

べたように，現在までのところ，この方言調査によるくわしいデータの蒐集は主として太西洋沿岸地帯に限定されているが，その範囲内では，かなり詳細な方言区分がすでに決定されている。次の図–15[61]は，この東海岸の方言地域の部分を拡大したものであるが，これら各地域における方言の特徴を，今度は，Fancis の調査資料[62]を基にして検討を加えていきたい[63]。

なお，言語地図のための調査の際には，地域的な方言の姿を出来るだけ実態に即して記録出来るよう，資料提供者を次のような3つのグループの中からそれぞれえらぶことにした。したがってここでは，このような各階層の使用言語の level の相違をも考慮に入れて，文中では



図—15

これを，A, B, C としてあらわす。これらに（ ）がつけられている時は，そのグループの言語表現が，その場合，あまり一般化されていないという意味である。又［ ］内数字の，例えば [1–6] は，地図上の 1 から 6 までの地域を包含することを示す。

A．古風で，あまり品のよくない教育程度の低い人々の言葉

B．若くて現代的な，普通の教育を受けた人々の言葉

C．洗練された，教育程度の高い人々の言葉

I. 北部 (The North) [1–6]

発　音

mourning と *morning*, *hoarse* と *horse*, *fourteen* と *forty* などにおいて，それぞれ，前者の場合は [o]，後者の場合は [ɔ]（又は [oh] と [ɔh]）となって，発音上の区別がはっきりしている。[64] A, B, C.

haunted, *careless* などにおける弱音節の中の [i] は南部の場合と同じように，[i] と発音される。A, B, C.

stairs, *care* において，これも南部の場合と同様，[æ]（又は [æh]）が用いられることがある。(A), (B), (C).

loud における二重母音は，音声学的には [ʌʊ] 又は [ɐʊ] となり，音素的には [əw] となる。A, (B).

with の *th* は常に [ð] と発音される。A, B, C. ただしこの傾向は，北部内陸地帯では弱まる傾向がある。

動詞の *grease* 及び *greasy* の -s- の発音は [s] となる。A, B, C.

roots の発音に [u] を用いる。

won't の発音に [ə] を用いる。A, B, (C).

gums の発音に [uw], [u] を用いる。A, (B). ただし北部内陸地帯ではこの傾向は弱い。

because を [bikə́z] と発音する。A, B, C. Carolina 州，Georgia 州南部の低地帯でもこれと同じ発音が聞かれる。

語　い

「バケツ」のことを *pail* という。A, B, C. (ただし，中部と南部地方では *bucket* である。)[65]

「台所から出る残飯」のことを *swill* という。A, B, C. (中部と南部地方では *slop* を用いる。)[66]

「木造家屋外壁の下見板」のことを *clapboards* という。A, B, C. (中部と南部地方では，*weatherboards* 又は *weatherboarding* を用いる。)

「小川」のことを *brook* という。A, B, C. ただし北部内陸地帯ではこのいい方はあまりない。南部では *branch* である。[67]

「種」のことを (*cherry*) *pit* という。[68] A, B, C.

「みみず」のことを *angleworm* という。[69] A, B, C.

「トウモロコシの粉に，ミルク，水，卵などを入れて焼いたパン」のことを *johnnycake* という。[70] A, B, C.

「荷車や馬車の遊動棒」のことを *whiffletree* 又は *whippletree* という。A, B, C.

「雨どい」のことを *eavestrough* という。A, B, (C).

「フライパン」のことを *spider* という。[71] ただし北部内陸地帯では，この傾向は強くない。

「荷馬車のながえ」のことを *fills*, 又は *thills* という。A, B.

quite (spry) というような表現をする。A, B, C. ただし，中部，南部地方では *right* である。

文　法

dive の過去形に，*dove* [dówv] を用いる。A, B, C.

sick to the stomach (はき気がする) のような表現がある。[72] A, B, (C).

All to once と言ったりする。(A), (B). ただし，北部内陸地帯ではあまりない。

(he isn't) *to home* というように *at* のかわりに *to* を用いる。[73] A, B. この表現も北部内陸地帯ではあまり用いられない。

'*oughtn't*' というべきところを *hadn't ought* という (図-11 参照)。A, B.[74]

was not が *wa'n't* であらわされ *it wa'n't me* というように表現される。A, B. ただし北部内陸地帯ではあまり用いられない。[75]

see の過去形に，現在形と同じ *see* を用いる。[76] A, B.

climb の過去形に *clim* を用いる。[77] A, B.

How be you? *Be I going to*? というような，be 動詞の使い方をする。[78] A. ただし，北部内陸地帯ではまれである。

begin の過去形にやはり *begin* を用いる。(A), (B).

'*scared*' を *scairt* と表現する。A, B.

I-a. New England 東部 (1, 2)

発　音

afternoon, glass, bath, France などの語の *a* は普通 [a] と発音される。*barn, yard* などの場合には，例外なく [a] である (図-5 参照)。A, B, C.

barn, beard, four, Thursday, horse, father などの [r] は母音の前に来る場合を除いて発音されない。ただし *idea of it* や *I saw him* などの場合には，linking [r], intrusive [r] が生ず

るのは普通である。A, B, C.

crop, lot, log などにおける "short-*o*" は [ɔ] と発音される。したがって，*fought law, horse* などの [ɔ] と，区別がつかないことが多い。

Tuesday, due, new などの t, d, n のあとでは，[uw] の発音が用いられる (図-7 参照)。A, B, C.

stone, coat などにおける o は [o] と発音される。A, (B), (C).

beard, ear 等においては [ih] の発音が用いられる。A, B, C.

語　い

「豚小屋」を *pig-sty* という。[79] A, B, C.

「凝固させたミルク」(*curdled milk*) のことを，*bonny-clabber*，又は *bonny-clapper* という。[80] A, B, C.

'cottage cheese' (白くて柔かいチーズの一種) のことを，*sour-milk cheese* という。[81] A, (B), (C).

'deep-dish pie' のことを，*apple dowdy* という。A, B, C.

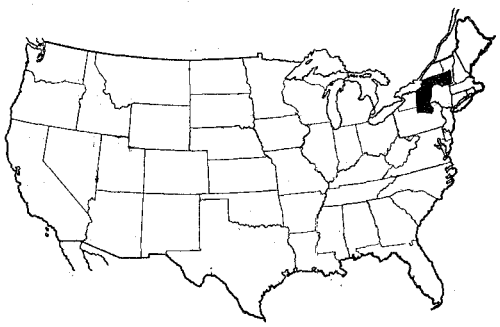
「スズカケノキ」(sycamore) のことを *buttonwood* という。A, B, C.

文　法

waked up のような表現がある。A, (B), (C).

New England 北東部 (1) では，*rise* の過去形を 'rose' の代りに *riz* を用い，同じく過去形 'dove' を *div*，'drove' を *driv* として用いる。又，分詞形の 'going' を *gwine* としたりする。A. (I was sitting) *agin* him，というように，'next to' の意味で *against* him を用いることもある。A.

I-b. 北部内陸地方 (4)



発　音

horse, four, father 等の語における母音のあとの [r] は発音される。A, B, C.

on, hog, fog, frog の o は [ɑ] と発音される。[82] ただし，*dog, log* は [ɑ] とならない。A, B, C.

Tuesday, due, new, music, beautiful の発音で，[iw] 又は [iw] が用いられる。A, (B), (C). ただし，五大湖地方及び中西部上方では，この傾向は強くない。

語　い

「玄関口」のことを *stoop* という。[83] A, B, C.

「凝固させたミルク」のことを，*lobbered milk*，又は *loppered milk* という。[84] A, B, C.

'cottage cheese' のことを，*Dutch cheese* という。[85] A, B.

「砂糖かえで栽培園」のことを *sugar bush* という。A, B, (C).

「石塊などを短距離の場所に運ぶそり」のことを *stone boat* という。[86] A, B, C.

文　法

there are buttons *onto* the coat というような表現をする。(A).

we burn coal *into* the stove というような表現をする。(A).

I-c. New York 市及び Hudson 河流域 (5, 6)

発　音 (特に New York 市附辺について)

母音の前に来る場合を除いて [r] 音は発音されない。A, B, C.

mourning と *morning*, *hoarse* と *horse* 等の発音上の区別がつかない。A, B, C.

adjourn と *adjoin*, *curl* と *coil* 等の発音で [ɔy] を用いる。A, B.

Mary, *dairy* において，[e] の発音を用いる。A, B, C.

foreign, *orange*, *borrow*, *on*, *hog*, *frog*, *fog*, *log* (ただし dog を除く) 等の語の *o* はすべて [ɑ] と発音する。[87] A, B, C.

pan のような語に [æ$^{\perp}$·] を用いる。A, B, (C).

lawn のような語に [ɔ$^{\perp}$·] を用いる。A, B, (C).

won't の発音に [uw] を用いる (図-12 参照)。A, B, C.

wheelbarrow などの語では [hw] の代りに常に [w] が用られる。A, B, C.

bottle, *mountain* 等において [t] の異音 [ʔ] が用いられる。A, B.

this などの発音で [ð] の代りに [d] が用いられる。A, B.

Long Island のような語の発音で，[ŋ] は [ŋg] というように発音される。A, B.

語　い (Hudson 河流域を含んで)

「牧師」のことを *Dominie* という。[88] A, B, C.

'cottage cheese' のことを *pot cheese* という。[89] A, B, C.

「ドーナツ」のことを *oilcook* という。A.

固有名詞の場合，「小川」の意味を *-kill* であらわす。A, B, C.

田舎では「四本柱で屋根を支えた乾草おおい」のことを *barrack*, 又は *hay-barrack* という (図-10 参照)。A, B.

田舎では「とうもろこしがゆ」のことを *suppawn* という。A, B.

田舎では「からかって歌う恋歌」の意味で, *skimmerton* 又は *skimmilton* を用いる。A, B.

文　法

He lives *in* King Street というような表現をする。A, B, (C).

We stood *on* line というような表現をする。A, B, C.

II. 中部地方 (7–13)

発　音

母音のあとに来る [r] は発音される。A, B, C.

on, wash, wasp, log, hog, frog, fog 等の発音において, [ɔ], [ɔh] 又は [ɔw] が用いられる。[90] A, B, C.

Mary, dairy の発音で [e] が用いられる。A, B, C.

haunted, careless 等における弱音節の発音に [ə] を用いる。A, B, C.

stomach の弱音節の発音に [i] を用いる。A, B.

with の *th* の発音は常に [θ] となる。

wash, Washington の発音に, しばしば [r] の発音が入る。[91] A, B.

語　い

「巻上式日よけ」のことを *blinds* という。A, B, C.

「フライパン」のことを *skillet* という。[92] A, B, C. この傾向はなお強くなりつつある。

「とんぼ」のことを *snake feeder* という。A, B, (C). ただしこの地方の南の方では *snake doctor* を用いている。

「紙袋」のことを *poke* という。A, B, (C). ただし Pennsylvania 東部を除く。

牛を呼ぶ場合に *sook*! という表現を用いる。A, B, C.

「さやいんげん, さやえんどうなど, さやを食べる豆」のことを *green-beans* という。A, B, C. ただし Pennsylvania 東部を除く。

「一寸の距離」の意味を *a little piece* と表現する。A, B, C.

「皮をむく」という意味の動詞に *hull* を用い, to *hull* beans というように表現する。A, B, (C).

文　法

climb の過去形を 'climbed' としないで *clum* を用いる。[93] A, (B).

see の過去形として 'saw' の代りに *seen* を用いる。[94] A, B.

二人称複数形を *you-uns* であらわす。[95] A, (B). ただし，Pennsylvania 東部を除く。

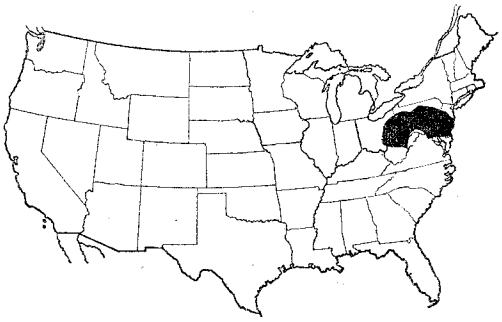
'as far as' の意で，*all the further* を用いる。[96] A, B.

'I'll wait for you' の for の代りに *on* を用いて I'll wait *on* you という。[97] A, B, (C).

I want off のような表現をする。A, B, (C).

時間をあらわすのに quarter *till* eleven というような表現をする。A, B, C.

II-a. 中北部地方 (7, 8, 10, 11)



発　音

Tuesday, new, due 等において，*t, d, n* のあとに [uw] の発音を用いる。[98] A, B, C.

mourning と *morning, hoarse* と *horse* 等において発音上の区別はつけられない。[99] A, B, C.

creek の発音では [i] を用いることが殆んどである。A, B, (C).

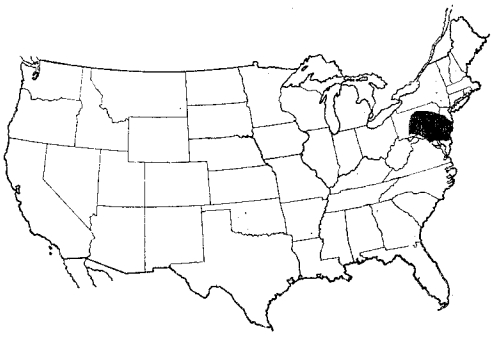
語　い

「雨どい」のことを *spouting* 又は *spouts* という。A, B, (C).

「小川」の意味で *run* を用いる。[100] A, B, C.

'cottage cheese' のことを *smearcase* という。[101]

II-b. Pennsylvania 東部 (7, 8)



発　音

frog, hog, fog 等の *o* を [a] と発音する (ただし dog は例外)。(A), B, C.

morning, warning, barn, marbles の発音に [ɔr] を用いる。

me, be, see 等の発音に [iy] が用いられる。

語　い

「乳母車」のことを *baby coach* という。A, B, (C). ただし，Philadelphia 地区に限られる。[102]

「舗装した人道」のことを *pavement* という。A, B, C.

更にこの地方では，次のようなドイツ語風の語いが用いられている。

「紙袋」のことを paper *toot* という（図–10 参照）。A, B.

「卵をだいているめんどり」の意味で *clook* を用いる。A.

「豚肉のこまぎれとトウモロコシ粉で煮固め，薄切りにしたりフライにしたりする料理」のことを *ponhaws* という。A, B.

「ドーナツ」のことを *fatcakes* という。[103] A, (B).

「凝固させたミルク」のことを *thick-milk* という。[104] A, B.

「幽霊」のことを *spook* という。[105] A, B, C.

「乾燥果実」のことを *snits* という。A, B.

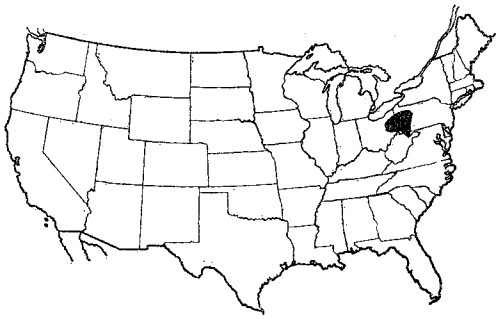
文　法

sick *on* the stomach（吐き気がする）という表現が用いられる。[106] A, B.

ドイツ語的な言い方として，例えば 'all gone' のかわりに *all* を用い，(the oranges are) *all* という風に表現する。A, B.

同じく，'work up' の代りに *got awake* を用いる。A, B.

II–c. Pennsylvania 西部 (10)



発　音

cot と *caught*, *collar* と *caller* 等において発音上の区別はつけられない。A, B, C.

food の発音に [u] を用いる。A, B.

drouth の発音に [uw] を用いる。A, (B).

語　い

「掛けぶとん」の意味で *hap* を用いる。A, (B).

「凝固させたミルク」のことを *cruds* 又は *crudded milk* という。A, B.

'remember' の代りに *mind* を用いる。A, B, (C).

「かき集めた乾し草の山」のことを *hay doodle* という。A, B.

「しまりす」のことを *grinnie* という。A, B.

「灯油」のことを *carbon oil* という。A, B.

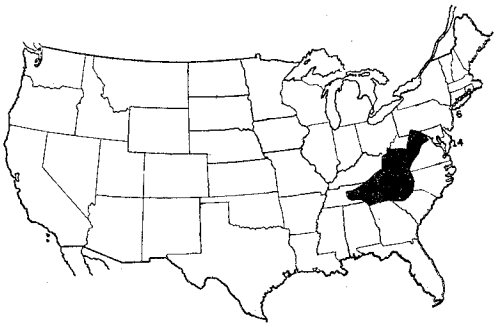
「乳母車」のことを *baby cab* という。A, B.

II–d. 中南部地方 (9, 12, 13)

発　音

nice time を発音するような場合に，有声子音，無声子音の前では [ay] が [a˙] 又は [a˙ᵊ] となる。A, B.

語　い



「ハーモニカ」のことを *french harp* という。A, B, (C).

「かついだり，かかえたりして運ぶ」という意味で *pack* を用いる。A, B.

「凝固させたミルク」のことを *clabber milk* という。A, B, C.

「みみず」のことを *redworm* という。A, B.

「砂糖かえで」のことを *sugar tree* という。A, B, (C).

「炉だな」のことを *fireboard* 又は *mantelboard* という。A, B.

「牛を飼うための囲い」のことを *milk gap* 又は *milking gap* という。[107] A, (B).

文　法

犬にかまれたことを *dogbit* というように表現する。

(the sun) *raised* というように *rose* のかわりに *raised* を用いる。A, (B)

drink の過去形及び過去分詞形をともに *drinkt* であらわす。A.

shrink の過去形及び過去分詞形をともに *shrinkt* であらわす。A.

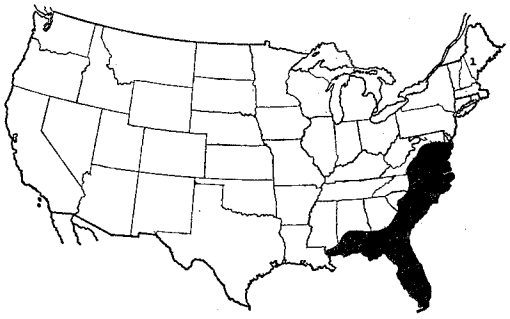
swim の過去形にも同じく *swim* を用いる。A.

'sat' を用いるかわりに *sot down* という。A.

所有格をあらわすのに *ourn, yourn* というように *–n* を用いる。[108]

I ran *on* him というような表現をする。A, (B).

III. 南　部 (14–18)



発　音

母音の前に来る場合を除いて [r] は発音されない。(A), (B), C. linking [r], intrusive [r] も南部方言では生ずることがまれである。

Mary などの発音では [ey] が用いられる。A, B, C.

haunted, careless 等の語における弱音節の発音では [i] が用いられる。A, B, C.

towel, funnel, montain の発音で [il], [in] が用いられる。A, B, (C).

bleat の発音で [ey] が用いられる。A, B, (C).

Mrs. の発音で [z] が用いられる。[109] (A), B, C.

語　い

「たきつけ」のことを *lightwood* という。[110] A, B, (C).

牛がなく 'moo' を *low* という。[111] A, B, C.

「物を持運ぶ」ことを *tote* という (図-9 参照)。A, B.

'take, escort' の意味で *carry* を用いる。A, B, (C).

「豚の小腸 (食用)」を *chittlins* という。[112] A, B, C.

牛に呼びかける場合に *co-wench*! という。A, B, C.

「豚の内臓 (食用)」のことを *hosslet* という。[113] A, B, C.

「さやいんげん」のことを *snap beans* 又は *snaps* という。[114] A, B, C. この用法は更にひろまりつつある。

「ハーモニカ」のことを *harp* 又は *mouth harp* という。A, B, C. ただし Charleston 地区を除く。

「ひとかかえのたきぎ」のことを *turn of wood* という。[115] A, B, (C).

「ドーナツ」のような菓子を *fritters* という。A, B, C.

「南北戦争」のことを 'Civil War' といわないで, *Confederate War* という。A, (B), (C).

文　法

"wasn't" の代りに *wan't* を用いて *it wan't me* という表現をする。これは北部についても同じである。[116] A, B, (C).

he belongs to be careful という表現をする。[117] A, B.

"heard" の代りに *heern* を用いて, *heern tell* というような言い方をする。[118] A.

he *does* を he *do* という。A.

'makes' の代りに *make* を用いて what *make* (him do it ?) のように言う。A.

'am' の代りに *is* を用いて, *is* I…? のように言う。A.

'going' を *gwine* と言う。A.

he fell *outn* the bed のような表現をする。A.

(I like him) *on account of* (he's so funny) のような表現がある。[119] A, (B).

'both' の意味をあらわすのに *all two*, 又は *all both* という。A, (B).

III-a. Virginia 東部 (14-15)

発　音

house, out などの無声子音の前では [əu] 又は [ʌu] が用いられるが, *down, loud* のような有声子音の前では [æʊ] が用いられる。A, B, C.

pasture, stairs 等若干の語の発音で [a] が用いられる。A.

white, nice などの無声子音の前では [əi] 又は [ɐi] が用いられるが, *time, ride* のような有声子音の前では, [aˑɪ] 又は [aˑɛ]が用いられる。A, B, C.

home に [u] を用いる。A.

afraid に [e] を用いる。A, B, C.

語　い

「卵入りのやわらかいパン」のことを *batter bread* という。[120] A, B, C.

「貯蔵室」のことを *lumber room* という。[121] A, B, C.

「麻の袋」のことを *croker sack* 又は *crocus sack* という。A, B, (C).

「牛を飼うための囲い」のことを *cuppin* という。[122] A.

「穀物の貯蔵所」のことを *corn house* という。[123] A, B.

「ばった」のことを *hoppergrass* という。[124] A.

「ピーナツ」のことを *goobers* という (図-10 参照)。A, B, (C).

文　法

climb の過去形を 'climbed' としないで *clome* を用いる。A.

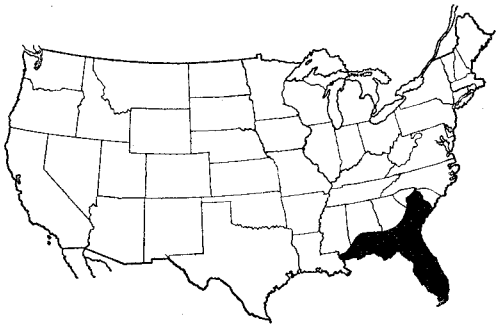
see の過去形に, 現在形と同じ *see* を用いる。A, B.

I ran *up on* him, のような表現をする。A, B.

he did it *for purpose* のような表現をする。A, (B).

III-b. 南 Carolina 及び Georgia 低地帯 (18)

発　音



house, night などの無声子音の前では, [əu], [ʌu] 及び [əi], [ɐi] が用いられる。A, B, C. ただしこれは海岸地方に限られる。

bird のような語の発音に [ɜɪ] が用いられることがある。(A), (B), (C).

road, post などの発音に [oˑᵊ] が用いられ, *eight, drain* などの発音に [eˑᵊ] が用いられる。A, B, C.

whip, wheelbarrow 等の発音で [w] が用いられる。(A), (B), (C).

pot, crop, oxen の発音では *o* は [ɔ] となる。A, B, C.

won't の発音では [u] 又は [ʊ] が用いられる。(A), (B), (C).

[r] の前では, 前母音一個だけで発音される傾向がある。その結果, *ear* と *air, fear* と *fair* 等は同音異義語になる。A, B, C. ただし海岸地帯の上部ではまれである。

coop の発音に [b] を用いる。A, B.

with, without の *th* はすべて [θ] となる。A, B, C.

pa, ma, palm, calm などの母音は [æh] となる。A, B, (C).

語　い

「たきつけ」のことを *fatwood* という。A, B, (C). ただし南 Carolina では海岸地帯, Georgia や Florida では内陸部に限られる。

「作りつけになっていない衣装だんす」のことを *press* 又は *clothespress* という。(A), (B), (C). 主に Santee Valley 附辺においてこの傾向がある。

「玄関口」のことを *stoop* という。[125] (A), (B), (C). 主に Savannah Valley において見られる。

「豚肉のこまぎれととうもろこしをいっしょに煮固め油であげた料理」(scrapple) のことを *cripple* という。(A), (B), (C). これも Savannah Valley に限られる (図–10 参照)。

「ピーナツ」のことを *ground nuts* という。A, B, C.

「ミルク，卵，肉入りのやわらかいパン」(*spoon bread*) のことを *awendaw* という。(A), (B), (C). ただしこれは Charleston 郡に限られる。

「草原」のことを *savannah* という。A, B, C.

「さとうもろこし」のことを *mutton corn* という。A, B, (C).

「ねり粉を丸めてゆでたゆでだんご」のことを *corn dodgers* という。A, B.

アフリカ語の影響を受けて，更に次のようなことばを用いる。

「食用がえる」のことを *bloody-noun* という。A, B, C.

「かめ」のことを *cooter* という。[126] A, B, C.

「ピーナツ」のことを *pinders* という。[127] A, B, (C).

「ひつぎ」のことを *pinto* という。(A). これは主として Negro の言葉である。

「白人」のことを *buckra* という。[128] A, B, C.

文　法

he *come* over *for* tell me というような表現をする。(A).

動詞の過去形や過去分詞形を現在形そのままで代用する傾向がある。(A).

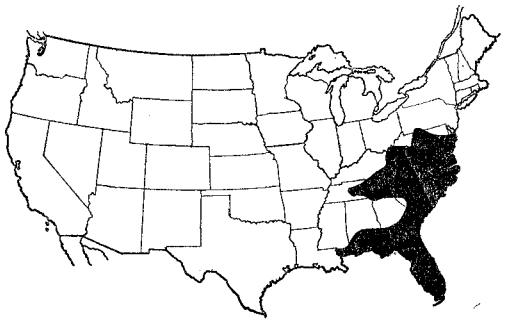
IV. 南部及び南中部 (9, 12–18)

発　音

Tuesday, due, new 等の発音において *t, d, n* のあとは [yuw] となる。A, B, C.

five, my 等の発音では [a•ᵉ] 又は [a•] が用いられる。A, B, C.

mourning と *morning, hoarse* と *horse, fourteen* と *forty* 等の発音では，[o] と [ɔ] がはっきり区別される。A, B, C.



mountain, loud 等の発音では多く [æw] が用いられる。A, B, C. ただし Charleston 地区ではまれである。

stairs, care, chair において [æ] の発音が用いられる。A, B, C.

poor, your 等において [o] の発音が用いられる。

coop, cooper では [u] の発音が用いられる。

put の発音に [ə] を用いる。A, (B).

bulk, bulge, budget の発音に [u] を用いる。A, B, (C).

sister, dinner, scissors, pretty, milk, mirror 等の発音で [i̇] が用いられることが多い。

語　い

「白パン」のことを *light bread* という。A, B, C.

「凝固させたミルク」のことを *clabber* という。A, B, C.

「穀物のから」のことを *corn shucks* という (図–9 参照)。A, B, C.

「貧しい寝床」のことを *pallet* という。A, B, C.

「新米の牧師」のことを *jackleg preacher* という。A, B, (C).

「軽い間食」のことを *snack* という。A, B, C. この点については New York 市も同じである。

「鳥の叉骨」のことを *pulley bone* という。A, B, C.

「とんぼ」のことを *snake doctor* という。ただし，Carolina から Georgia にかけての海岸地帯は例外である。

「幽霊」のことを *ha'nts* 又は *haunts* という。A, B, (C).

'forget' のかわりに *disremember* を用いる。A.

「乾し草の山」のことを *hay shocks* という。A, B, C.

「小川」のことを *branch* という。A, B, C.

文　法

二人称複数形をあらわすのに，*you-all* を用いる (図–11 参照)。A, B, C.[129]

might could のような言い方をする。[130] A, B.

I'm not for sure のような言い方をする。A, B.

see の過去形に 'saw' を用いないで *seed* を用いる。[131] A.

冠詞の *an* を用うべきところを *a* で代用して *a apple* とするような言い方がひろがりつつ

ある。A, B.

take の過去形に 'took' を用いないで，例えば *I taken* のように言う。(A), B.

take の過去分詞は *taken* の代りに *tuck* を用いる。A, (B).

help の過去形を 'helped' としないで *holp* という。[132] A, (B).

rise の過去形を 'rose' としないで *riz* を用いる。A. この点では New England 北東部でも同じである。

過去形 'dived' の代りに div を用いる。A. この点も New England 北東部と同じ。

may の過去形に 'might' を使わないで例えば *mought have* のような言い方をする。[133] A.

fists, posts, costs 等，複数語尾の発音に [iz] [əz] を用いる。A.

I ('ve) done told you that のような表現をする。A, B.

「買ったパン」の意味を *bought bread* というように表現する。A, B.

use to didn't を用いて，例えば，"He *use to didn't* like it" のような表現の仕方をする。[134] A, B.

6. 結　　語

以上，アメリカ英語の方言の地域的相違を，発音，語い，文法の3つの面から概観を試みて来た。そしてその結果先ず感じられることは，やはりアメリカ方言の特色は，発音の面におけるよりも，むしろ語いや文法的用法により多くあらわれているのではないかということである。[135] 例えば，*hoarse* と *horse*, *mourning* と *morning* における [o] と [ɔ] の区別，*greasy*, *Mrs* 等に [s] を用いる場合と [z] を用いる場合の相違，*Tuesday* や *new*, *due* 等の母音の前に [j] に似たわたり音が入るか入らないかの問題，それに intrusive [r] を含めて，[r] 音の添加の有無等々，それに少なからず例外が入り込んで，発音上の地域的差異は，極めて微妙であり且つ軽微であると言わざるを得ない。[136] しかも，この軽微な相違そのものも，教育程度の低い古い世代の人々の発音に目立ちやすい事実を考えれば，教育の普及が一層進んで行くにつれて標準化も進み，相違は更に軽微なものになって行くであろうことも想像に難くない。従って，特にアメリカの場合，方言学者でない一般の人々が，方言の地域的相違として受けとめているものの実態は，発音よりも，多分に，語いや文法的用法にあるのではないかと思われる。これらの領域においては，地域的相違の範囲と程度は，より多く明確な形で感じられ易いからである。

例えば語いの点では，よく引合いに出される例であるが，*earthworm* の分布状況など，方言研究の格好の資料を推供しているといえるであろう。調査の結果では，*earthworm* は都市の中心地の教養ある人々によって用いられ，それに対して *angleworm* は北部の地域語であり，*fishworm* は中部地域，*fishing worm* は南部沿岸の地域語であることが判明している。又

fishworm の用いられている広い地域の中で，*fish bait* とか *bait worm* というような語も併存していることもわかった。

更にこの *earthworm* については多数の地方語があり，その多くは主として年長の比較的教養の低い人々によって用いられている。例えば New Hampshire や Massachusetts の一部の地域では *mud worm* が用いられ，Rhode Island では *eace worm*, Connecticut の奥地では *angle dog*, Virginia の東海岸では *ground worm* が用いられているといった風にである。この語は更に，North Carolina の山地では *red worm* に変り，Ohio 州の一部地域では *dew worm* と呼ばれる。Massachusetts の Buzzards 湾一帯，Pennsylvania のドイツ人居留地域，それに，North Carolina, Maine, Wisconsin のドイツ人植民地帯などでは *rainworm* が用いられている例もある。[137] このように，*earthworm* については，比較的古い地方語が豊富にあり，3つの明確な地方語があり，その上に更に，South Carolina や North Carolina や Virginia の沿岸沿いに，地方民の教養語としての *earthworm* がある，ということになるのである。[138] すべての語がこのように，かなり明確な形でその地域的分布を決定出来るというのではないが，isogloss を作るにしても，少なくとも発音よりは，その分布の領域を決定し易いように思えてならない。

一方，文法的用法についての方言的特徴は，すでに見て来たように，先ず語の変化形に明確にあらわれる。現在時制に関していえば，三人称単数の変化を，*he want* とか *she write* などのように *s* を削除したり，*I has some good friends* とか *You is in lots of trouble* などのように，一人称や二人称にも，三人称独特の形を用いているのがその例である。

動詞の過去や過去分詞においては，地域的相違は更に顕著にあらわれることも，すでに示した数々の例によって明らかである。そしてこの場合，地域によって，変化形の古い形をそのまま保持している場合と，類推過程によって，不規則なものを単純化する場合と，二つの正反対の傾向が認められることもわかった。

この中，古い形の起原は，主として初期の英語のいわゆる強変化動詞が，不定詞と過去分詞に加えて，複数の過去形と単数の過去形を持っていたという事実によるものであろう。したがって，*write* の過去形として用いられている *writ* は，*begun* や *swum* と同様に，古い複数過去をあらわしたものがそのまま方言の形で残されたものといえるのかも知れない。

しかしこれとは逆に，現代に至る動詞の発達の圧例的な傾向は，古い少数の活用を犠牲にしても，規則変化を強化増大する方向に向って来た。これは結果として，過去形や過去分詞の形にさえ反対して，現在形の語幹に接近して行く傾向であると考えられる。この傾向も，すでに見て来たように，標準以下のことばの形においては類推課程によって特に強められて，*know* や *see* のような不規則動詞にまで *knowed seed* のような過去形が用いられ，過去分詞形としても，*have gave, have wrote, has went* のようになったりした。そしてその反面，*I done, he*

taken のように過去分詞形と過去形が入れかわって，前述の傾向と逆行するかの如く云われる現象も地域によっては見られるが，これも，標準的英語には見られなかった，一種の類推作用の結果と見るべきなのであろうか。

このようにして見てくると，発音，語い，文法のいずれをとってみても，一様に言えることは，標準以下のことば，すなわち比較的教育程度の低い，古い世代の人々の使うことばの中に，その方言的特色の多くを見出せるということになるようである。それならば，近代的交通機関や，ラジオ，テレビ，新聞等マスコミの発達に加えて，教育の高度の普及が，アメリカ英語においても徐々に，その方言的特徴を弱めていく傾向にある，と結論づけても差支えないであろう。事実，California 大学の Stewart 教授も，このような傾向を指摘して次のように述べているのである。

"The differences are probably becoming less. The distinctive New England dialect has been largely sugmerged in the populous centers of Massachusetts, Rhode Island, and Connecticut. Southern speech, also, is almost certainly growing closer to General American because of modern methods of communication. Even fifty years ago a child might grow up in a southern town, seldom be twenty miles away from it, and rarely hear any speech except that of the neighborhood. Now a southern child is likely to have radio, TV, and motion pictures, and on them all will hear mostly a dialect that is not his local one. If a comedian in New York or Hollywood begins using a new slang word or popularizes a new use of some old word, people in Georgia are just as likely to take it up as people in Massachusetts. Visit Yellowstone or any other non-southern tourist center, and observe the numerous cars from southern states. All those Southerners drove across Yankee states to get there, and talked to people on the way.[139] If a Southerner is drafted, he nearly always (because Southerners are a minority) serves his time in an "outfit" composed mostly of Yankees. Isolation is the mother of dialects, and the South is now no longer isolated."[140]

アメリカ英語には方言がないとする見方も，イギリス英語と比べてさえ，方言差ははるかに少ないという事実のほかに，このような傾向が一つの重要な背景になっていることを否定することは出来ない。従って，言語地図のための方言調査が更に進められ，微妙な地域的相違がそれによって明らかにされていく方向とは逆に，結局一般的には，ここに引用した記述が，十分に納得され，受入れられているのが，アメリカ英語の方言に関する現実の姿であると考えてもよいのであろう。

〔附　記〕

本稿の一部は，昭和41年2月5日，北大クラーク会館における日本時事英語学会北海道支部第二回研究発表会で，すでに筆者が発表したものであるが，今回，新たに加筆修正して全体

をこのような形でまとめてみた。本稿執筆にあたっては，本学の増田貢教授，小樽商大の北市陽一助教授及び札幌のアメリカ文化センターから数多くの文献を借用させていただいたことをここに附記して，厚く感謝の意を表する次第である。

注

1) Francis は，このような様々な英語が相互に相違している極端な場合の例として，'if an Alabama farmer, a Scottish shepherd, a London Cockney, and a Maine lobsterman were to be suddenly thrown together, they might have considerable trouble before they were able to converse with any mutual understanding. Yet each one would stoutly maintain that he was speaking English.' と述べているが，アメリカ英語とイギリス英語との相違については，'our language is only a variant version of the mother tongue. After all, most Americans can converse freely with most Englishmen without making more than minor alterations in their ways.' と言い，H. L. Mencken が彼の大著のタイトルを *The American Language* としたのは "overstate" であるとしている。

Francis, W. Nelson. *The Structure of American English*, New York : The Ronald Press Company, 1958, p. 42 参照。

2) Pyles はこの点について，アメリカ英語の uniformity を一応認めながらも，次のように述べている。'To say that American speech is uniform is thus not the same as saying that the speech of any one section of the country is precisely the same as that of any other section; such a claim could not be made even for individuals of the same cultural background in the same section of the country.' Pyles, Thomas. *Words and Ways of American English*, New York : Random House, 1952, p. 69 参照。

3) Barnhart, et al. *The American College Dictionary*, New York : Random House, 1956, xxviii.

4) Thomas, Charles K. *An Introduction to the Phonetics of American English*, New York : The Ronald Press Company, 1947, p. 142 参照。

5) Mencken, H. L. *The American Langnage*: *Supplement II*, New York : Alfred A. Knopf, 1948, p. 102 参照。この点につき，アメリカ英語とイギリス英語及びイタリア語などを比較して，Mencken は次のような注釈をつけている。"The difference in speech between Boston and San Francisco," says the Encyclopaedia Britannica, fourteenth edition; London, 1929, Vol. XIII, p. 698, col. 2, "is less than what may be observed between two villages in Great Britain that are only a few miles apart." In other countries the same divergences are to be found, for nowhere else is there so much interstate migration as in the United States. The situation in Italy is thus set forth by Mr. Hugh Morrison (private communication, Feb. 8, 1946): "Few American realize how fortunate they are in living in a country in which the differences in speech from place to place are slight. The following is a sentence, 'Inside there were written three words,' in the dialects of ten different places in Italy:

"Tuscany (standard Italian): Dentro c'erano scritte tre parole.
"Piedmont: Drenta a i era scrit tre parole.
"Lombardy: Denter gh'era scritt tre paroll.
"Venice: Drento ghe era scrite tre parole.
"Emilia: Deintr a i era scrett trai paroll.
"Rome: Drento c'erano scritte tre parole.
"Sicily: Dintra c'eranu scritti tri palori.
"Sardinia: Intro ci vini inscrittas tres paraulas.
"Milan: Denter gh'erò scritti trè parol.
"Naples: Entro c'erano scritto tre paruolo.

"The study of the Tuscan dialect is required in all the schools in Italy, but it is a mistake to

think that everyone learns it. When I was studying Italian in New York there were two young men fresh from Italy trying to learn their own language. They were not from backwoods communities but from cities—Milan and Bari. They had had the elementary schooling required of everybody, and all their textbooks were in standard Italian. They could read Italian all right, but in every other respect they were the poorest students in the class. They often resorted to English in talking to each other"

6) Pyles, Thomas. ibid, p. 70 参照。ここでは次のように述べられている。"…practically all who have written knowingly upon the subject have noted that American English is characterized by a high degree of uniformity. It is well to remember, however, that the conception of uniformity in speech must be to a large extent relative; that is, much depends upon who is doing the observing."

7) Pyles, Thomas. ibid, p. 70.

8) Wyld, Henry C. *The Historical Study of the Mother Tongue*, London: John Murray Ltd., 1920, p. 94 参照。このような言語が平均化して行く過程を彼は次のように言う。

"The majority of tendencies of variation in speech habit which exist in the individual will be shared also by the speech community at large, so that they will be strengthenend and encouraged by social intercourse. Those tendencies, on the other hand, which are peculiar to the individual, and which are not shared by the community, will not gain ground, but will be eliminated. The strongest and most clearly marked of these individual tendencies will be unconsciously suppressed, or, in some cases even, will be deliberately checked in youth, by the corrective ridicule of associates; others, which are not sufficiently marked to be generally noticeable, either disappear naturally with the definite acquirement of the speech basis, or may continue to exist, so long as they do not develop beyond the point at which they are recognisable by the speaker himself and by his companions. Thus there is common to all speakers, and this develops, unperceived and gradual, but also, for the time being, unchecked."

9) この場合, Wyld の言うように, isolation の程度と持続期間が方言成立を左右する重要な要素になることは勿論である。"…when isolation occurs, which splits one community into two or more groups, the necessary conditions are present for the differentiation of the originally homogeneous speech into dialects. Each group will tend to develop its language along different lines, and the differences, slight enough in the beginning, may in time attain considerable proportions." Wyld, Henry C. ibid, p. 95 参照。

10) この場合, dialect differences と language differences との違いが問題にされることがあることを附記したい。この相違を判定することは容易ではないが, これについて Francis は次のように言う。

"It is often a debatable point as to where one should draw the line between dialect differences and language differences. For instance, Bloomfield shows that Dutch-German actually constitutes one language, with many different local varieties, three of which—Standard High German, Standard Dutch, and Standard Flemish—are recognized as literary and political languages. On the other hand, what are popularly known as "Chinese dialects"—Peipingese, Wu or Shanghai, Fukienese, and Cantonese—are really sharply different languages, though the differences are disguised by their common use of a mutually intelligible morphographic writing system. Similarly, the attitude toward locally differentiated dialects—the kind we are most familiar with—differs widely from language to language." Francis, W. N. ibid, p. 481 参照。

11) 市河三喜,「英語学辞典」, 研究社, 1958, p. 296 参照。

12) Francis, ibid, pp. 48-49.

13) これについて Francis は London と Paris の例を上げ次のように述べている。

"If a given locality becomes dominant in its language area to the extent that its inhabitants become the class to whom the other regions look for leadership, the dialect of that locality may very well acquire such prestige as to become standard. This happened in both English and French

in the later Middle Ages. In the earlier medieval period, no single one of the many dialects of either English or French was considered standard. But as London and Paris grew into Prominence as centers of government and trade, their dialects acquired prestige. By the fifteenth century, London English and Parisian French were accepted as standrd by nearly everybody, including those who did not speak them." Francis, ibid, pp. 46–47.

14) 常識的には dialect は標準語の下位区分として考えられている。例えば普通の用法では，標準語は全国的な言語を意味し，dialect は標準語に対して従属的な地位にある変種，比較的小さい speech community で用いられる特定の言語を指している。一応このような区別の出来ることは言うまでもないが，言語現象を真の姿で捉える時は，標準語と dialect との間には，本質的な区別はつけられないことを知らねばならぬ。何故ならば，言語という実体はないのであって，存在するのは言語を話す人間だけだからである。そして人は必らず何らかの社会に属し，その社会の言語，即ち方言を話すものであるから，実在するものは方言だけであるといわなければならない。標準語というのもそれ自身で存在するものではなく，ただそれを話す人々においてのみ成立するものであるから，やはりこれは，標準と見做された言語を話す人々の社会の方言に過ぎないのである。市河三喜, ibid, p. 296 参照。

15) これに関聯して，American English の "best speech" について附記しておきたい。Mencken の *The American Langnage* には次のような注釈がある。

"The question where the best American is spoken is often discussed in the newspapers. Noah Webster, after his tour of the country in 1785–86, is said to have nominated Baltimore. In 1928 a group of 100 graduate students in English at Columbia, after hearing some of the Phonograph records assembled by W. Cabell Greet, chose St. Louis. (It's in St. Louis That Americanese is Spoken, New York *World*, Nov. 9, 1928). Ann Royall, in her *Skecthes of History, Life and Manners in the United States*, published in 1826, said: "The dialect of Washington, exclusive of the foreigners, is the most correct and pure of any part of the United States I have ever yet been in," and this was supported 117 years later by Francis X. Welch in the New York *Times*. (All Speech pure to Speakers, Sept. 17, 1943). In 1936 a writer in *Business Week* voted for Benton Harbor, Mich. (Editorially Speaking—, June 6, p. 51). As for me, I wobble between Baltimore and Benton Harbor, inclining toward the former because it is my native place and fixed my own speech-habits, and toward the latter because it is in the same *Sprachgebiet* as Owosso, Mich., the birthplace of Thomas E. Dewey, whose General American is the clearest and best that I have ever heard from the lips of an American rhetorician." Mencken, ibid, p. 129.

16) Barnhart, ibid, XXX.

17) Krapp, George P. *The English Language in America, Volume II*, Tokyo: Senjo Publishing Co., Ltd. p. 7 参照。"If one considers all the varieties of English speech which are in existence in any community at any given moment, one becomes aware of the utter impossibility of giving a complete picture of this speech in all its shades and levels of dialect." と彼も述べている。

18) Marckwardt, 一色マサ子訳,「アメリカ英語」, 研究社, 1960, p. 10.

19) これについては別稿, Takemoto, Shozo, "A Comprehensive Survey of the Foundations of American English" 室工大研究報告, Vol. 5, No. 2 参照。

20) 豊田 実,「アメリカ英語とその文体」, 研究社, 1951, pp. 1–2 参照。

21) イギリスが 1664 年に Neuw Amsterdam を征服した時に，英国以外の各国からの移民にはじめて citizenship を与えた。その際の移民の国籍だけでも 18 に上ったという。このことからも，移民の民族的背景の複雑さの一端がうかがえよう。Takemoto, Shozo, ibid. 参照。

22) この移動状態の詳細については，Francis, ibid, pp. 500–508 参照。

23) Havighurst & Neugarten. *Society and Education*, Boston: Allyn and Bacon Inc., 1958, p. 287.

24) Kennedy, John F. *A Nation of Immigrants* 東京, 成美堂版, 1966, とびらの地図より修正。

25) この点について，Francis の次のような観察は興味深い。

"Those who have observed dialect differences are often curious as to their origin, and have invented many fanciful explanations. The two most common explanations of this kind are the physiological and the climatic. Certain people whose speech we find objectionably different from our own may be credited with a constitutional malformation of the vocal organs that prevents them from pronouncing the language "normally" (i.e., the way we do). Thus, the American Negro is sometimes supposed to be unable to pronounce a constricted postvocalic /-r/ because his lips are too thick, although what the lips have to do with the constriction or nonconstriction of /-r/ is a mystery to even the most elementary student of articulatory phonetics. More popularly, the "Southerner" is supposed to speak with a drawl (the coastal South Carolinian doesn't!) because the climate is so hot that it makes him lazy, although Bengali, in a far hotter climate, is spoken at an extremely rapid tempo. A professor of pedagogics at the University of Colorado once declared that Minnesotans nasalize their speech because of the damp climate; Eric Partridge has repeatedly attributed the supposed nasalization of Australian speech to the excessively dry climate. When so many claims, often contradictory and often in complete disagreement with observable fact, are made for the influence of the climate, it is easy to see that the investigator must look elsewhere for the origins of dialect differences. He finds these origins in the relationships among people—in the homes from which they originally came and in the social environment in which they now live." Francis, ibid, pp. 482–483.

26) イギリスからの移民の中に，多くの技術者がいたことはよく知られている事実である。彼等は最初農業には興味を示さなかったが，一旦農業を主業として生計をたてていかなければならないと知るや，アメリカ独特の数多くのすぐれた農機具を作り出した。American ax といわれるものなどはその一例である。

27) Francis, ibid, p. 509 参照。彼はこのことについて次のように述べている。

"Actually, the colonies were far more urban than is commonly realized. In 1775, Philadelphia and Boston were the second and third most important cities in the English-speaking world, with New York and Charleston as important seaports; all four were centers of wealth and the amenities of urban life."

28) この問題については，Marckwardt & Quirk, *A Common Language*, London: The British Broadcasting Corporation, 1964, pp. 44–49. 及び豊田実, ibid, pp. 7–10, 等を参照。

29) Francis, ibid, pp. 483–485.

30) 例えば，Marckwardt に次のような記述がある。

"Early travelers to America and native commentators on the language agree on the existence of regional differences at an early period in our national history. Mrs. Anne Royal called attention to various Southernisms in the works which she wrote during the second quarter of the nineteenth century, and as early as 1829, Dr. Robley Dunglison had identified many of the Americanisms, in the glossary he compiled, with particular portions of the country. Charles Dickens recognized regional differences in the English he encountered in his first tour of the United States, and William Howard Russell, reporting on Abraham Lincoln's first state banquet, at which he was a guest, mentions his astonishment at finding 'a diversity of accent almost as great as if a number of foreigners had been speaking English.' Marckwardt, Albert H. *American English*, New York: Oxford University Press, 1958. p. 132.

31) Bronstein, Arthur J. *The Pronunciation of American English*, New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1960, p. 43 参照。又演劇に関する方言の分析については次の書がくわしい。Herman & Herman, *American Dialects*, New York: Theatre Arts Books, 1947.

32) Bronstein, ibid, p. 44.

33) ドイツの Georg Wenker が *Deutschen Sprachatlas* 作成にとりかかったのが 1876 年で，これが近代的な言語地図調査のはじまりであるとされている。このあとでフランスも，1902 年から 1910 年にかけて Jules Gilliéron が中心となり，*Atlas linguistique de la France* を作成した。これら両者の調査方法等

については，Francis, ibid, p. 487 参照。

34) Bronstein, ibid, pp. 40–41 参照。

35) Francis, ibid, pp. 488–494 参照。

36) Francis, ibid, p. 489.

37) このようにして教育を受けた実地調査員は，自己に与えられた分析的作業をやりとげたばかりでなく，同時にそれぞれの言語学的研究において立派な業績を上げたものが少なくない。例えば，Atwood や McDavid の研究のように。注 42), 43) 参照。

38) 例えば，特定の職業名である shrimp fisherman とか sheepherder というような語は，その地域全部の人々が知っているわけではないので，このような種類の語を調査に用いないように配慮する。

39) 録音されるという意識の下では，気軽な雑談などでは口からふと洩れるかも知れないような，変った文法的表現や，語い，発音等が押えられてしまうかも知れない懸念があるので，このことからも，調査員の耳の訓練は特に大切であると考えられる。

40) Francis, ibid, p. 579.

41) Bronstein, ibid, pp. 302–304.

42) この調査結果の要約は，Kurath の *Word Geography of the Eastern United States* (Ann Arbor, 1949) と E. Babby Atwood の *Survey of Verb Forms in the Eastern United States* (Ann Arbor, 1953) の二著の中に生かされた。

43) この間，Mrs. Virginia McDavid は，Atwood の研究をモデルにして，*A Survey of Verb Forms in the North-Central States and the Upper Midwest* (Minnesota, 1956) を発表した。

44) この他の派生的研究としては，DeCamp の San Francisco 地帯の言葉に関する論文が出されている。

45) Bronstein, ibid, p. 47. これは Hans Kurath, *A Word Geography of the Eastern United States* からとったものである。

46) Macwardt, idid, p. 135 参照。

47) 特に発音の場合には，これを isophone (等音線) といって，語形，語い，構文の場合の isogloss と区別することもある。市河三喜, ibid, p. 534 参照。

48) Francis, ibid, p. 498 参照。"After enough features have been charted, it is then possible to draw a compositive map comparing the isoglosses. If several isoglosses approximately coincide for a great part of their length, we have a bundle of isoglosses, which may be said to constitute a dialect boundary between two dialect areas."

49) Francis, ibid, p. 584.

50) Francis, ibid, p. 585.

51) Francis, ibid, p. 583.

52) Francis, ibid, p. 582.

53) Mencken, ibid, pp. 101–270 参照。

54) Thomas, ibid, とびらの図参照。

55) Thomas, ibid, pp. 142–160 参照。

56) Mencken は，この地方の方言の特色が，accidence や vocabulary などよりも発音にあるという Charles A. Bristed の意見を紹介し，且つ Bristed の次のような観察を引用している。

"Among its features of this sort may be mentioned a nasal intonation, particularly before the diphthong *ow*, so that *cow* and *now* are sounded *kyow* and *nyow*; a perverse misplacing of final *g* after *n*, almost equal to the Cockney's transposition of initial *h*, making *walkin* of *walking* and *capting* of *captain*; a shortening of long *o* and *u* in final syllables; e.g., *fortun* and *natur* for *fortune* and *nature*; on the other hand, a lengthening of various short syllables, as *naughtin* for *nothing*, and *genuine* for *genuine*. Also, a general tendency to throw forward the accent of polysyllables and sometimes even of dissyllables; *e.g.*, *territóry*, *legislátive*, *conquést*. This tendency, from which, by the way, the very best classes of New England society are not altogether free, has

been noticed as a Scotticism, erroneously, we think, for though the Scotch cometimes misplace the accent, they throw it backward as often as forward, in *mágazine*, for instance. Some peculiar words, however, are found, as *doing chores*, for doing miscellaneous jobs of work, (a North Country word, cf. *char-woman*), and many peculiar uses of ordinary words." Mencken, ibid, p. 114. 尚，この地方の発音の史的概観については，次の書がくわしい。Lindbead, Karl-Erik. *Noah Webster's Pronunciation and Modern New England Speech*, Cambridge; Harvard University Press, 1954.

57) この地方の方言の特徴を調べる場合，Thomas の言う次の点に留意しなければならない。

"Speech in this area is mixed. Pennsylvanian in origin, it has been influenced by southern speech. The long isolation of the mountain settlements favored the retention of older linguistic forms, and has provided plentiful material for students of folk lore. Consequently the speech of the region has been studied more completely on the folk level than on the standard level." Thomas, ibid, p. 159.

58) ただし，その地域差は顕著なものではない，と Mencken は次のように言う。

"Because of its steady encroachment upon the other dialects the area it covers today is shifting and somewhat vague, but all authorities seem to agree that it begins in the East somewhere in the vicinity of the Connecticut river, runs southward to the line of the Potomac and Ohio, and covers the whole country, save for a few outcroppings of Southern or Appalachian-speech, west of the Mississippi. Kenyon and Knott call it Northern American and Kurath calls it Western, but in view of its immense spread it seems to me that General is preferable. It is, of coures, not entirely uniform throughout its area, and Kurath distinguishes a Central or Midland speech from that of the Great Lakes Basin and the Far West, but these differences are very slight, and a casual observer from some other *Sprachgebiet* notices no substantial variance between the speech of a Western New Yorker, that of a Michigander, that of a Nebraskan and that of an Oregonian. This General American, says Kurath, is spoken in the Middle Atlantic States (New York, New Jersey and Pennsylvania), the Middle West (Ohio, Indiana, Illinois, Wisconsin, Minnesota, Iowa and Northern Missouri), and the Further West to the Pacific Coast. He might have added most of Delaware, Maryland and West Virginia, a part of Kentucky, and a not inconsiderable part of New England." Mencken, ibid, pp. 103–104.

59) Bronstein, ibid, p. 46.

60) Bronstein, ibid, p. 48.

61) Marckwardt, 一色訳, ibid, p. 179.

62) Francis はこの調査資料をまとめるに当って，次のようにことわっている。

"The following tables, then, are essentially a conflation of work on the regional distribution of linguistic forms in the United States and Canada. Some parts have appeared in published volumes, like those of Kurath and Atwood; other parts are found in unpublished dissertations like those of Avis, Davis, and Frank; still others appear in articles and reviews; some have been presented only orally. Where phonemic data is presented, the transcriptions have been roughly adapted to the system used in other part of this book. This adaptation, of course, does not mean that the linguistic geographer feels that his data can be adequately represented by such a system. The structural peculiarities of the Charleston vowel-system, for example, make it impossible to represent it accurately in the nine-vowel-plus-three-semivowel analysis; for other individual Southern and South Midland dialects at least ten vowels and perhaps additional semivowels are necessary. Where these difficulties appear most strikingly, phonemicization according to this system has not been attempted, and the data is presented phonetically; in many other places the phonemicization is done with extreme diffidence. It is probable that a different set of terms and perhaps a different graphic device (such as reverse slants) will be necessary to represent structural phonological differences between dialects." Francis, ibid, pp. 512–513.

63) Francis, ibid pp. 513–526 参照。発音符号については附表参照。

64) Marckwardt, ibid, p. 139 参照。

65) Pyles, ibid, p. 61 参照。*pail* の語原については明らかでない。*Oxford English Dictionary* (以下 *OED* と略す。)

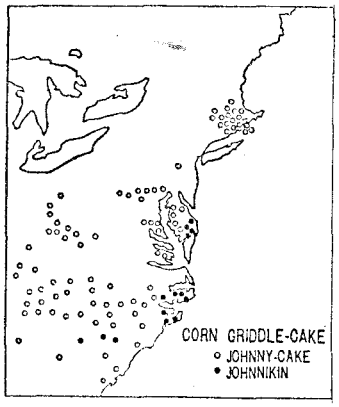
66) イギリスでは，1570年頃から使われている記録があるが，アメリカでは1920年頃から次のような意味で用いられた。The milk and fat pot-liquor and meal are, when put together, called, in Long Island, *swill*. *OED*.

67) この外にも，地域的に，*run*, *creek* などが区別して用いられることがある。Krapp によればこれらの語は次のようにしてアメリカで用いられるようになった。The word *run* as a colloquial American word for a stream of water, as in Bull Run, etc., had an early origin in the phrase "a run of water," meaning a stream, *Huntington Records*, p. 86 (1666), and often. It occurs in the *Hempstead Records*, I, 314 (1679), "the run Called Jonsons run," also I, 167 (1665). The *New English Dictionary* gives two earlier citations, one for 1605 and another for 1652, and describes the word as American and northern British dialect. The earlier meaning of *creek* as a branch of the sea has been generally extended in America to mean a small fresh-water stream, though this use is not yet very common in New England, where such streams are usually called brooks. Krapp, George P. ibid, Volume I, p. 85.

68) 元来オランダ語からの借用語であるが，それがこの地方に強く残された。Mencken, H. L. *The American Language, Supplement I*, New York: Alfred A. Knopf, 1956, p. 186 参照。

69) この語の地域的分布状況については後述の「結語」参照。

70) この語の起原については諸説紛々としているが，Craigie の *A Dictionary of American English on Historical Principles* (以下 *DAE* と略す) には1793年の用例がある。Shawnee Indian が，トウモロコシの粉とミルク，卵を材料にこんなパンを作ったので *Shawneecake* から変ったとする説。このパンを持って，長い旅に出たので *journey cake* といったのがもとだとする説。もと故国やスコットランドの田舎で，めの粗い小麦で焼いた小さいパンの *jannock, johnick, johnick bread* から生れ，トウモロコシを原料としてからは，*jonakin, jonikin, johny bread, johnny cake, journey cake* といい，*johnny cake* が一般的となったという説。この中で，最後の説が真びょう性があるということになっている。今日でも *jonikin* (*johnnikin*) は南北 Carolina の東部や，Maryland の東岸では用いられる。*Land of johnnycake* といえば New England のことをいい，口語では *Johnnycake* で New England 人を表わす。Kurath の「言語分布」をもとにして，*johnnycake* の分布図を作ると，図–16, 図–17 のようになる。図–16 は分布状況を，図–17 は分布範囲をあらわす。Mencken, H. L. ibid, *Supplement I*, p. 203, 山崎英夫「アメリカのことば」，研究社，1961, pp. 79–80 及び Kurath, H., *A Word Geography of the Eastern United States*, University of Michigan Press, 1949, Fig. 116 参照。



図—16

図—17

71) この意味では，アメリカで用いられはじめた語である。用例は1830年から記録されている。*OED.* 地域的分布については，Marckwardt, ibid, pp. 145–146 参照。

72) 一般的には，*sick at the stomach* 又は *sick in the stomach* で，1653年から1831年までの用例があるが，イギリスでは殆んど廃語で用いられていない。*OED.* 前置詞に *to* を用いるのは北部の特徴である。Marckwardt, ibid, p. 140.

73) Marckwardt, ibid, p. 140 参照。

74) 尾上政次「現代米語文法」研究社，1960, p. 115 参照。

75) 語法については，尾上政次，ibid, p. 89 参照。

76) Marckwardt, ibid, p. 140 参照。

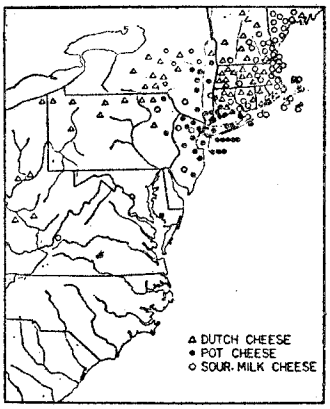
77) Marckwardt, ibid, p. 140 参照。

78) Marckwardt, ibid, p. 140 参照。

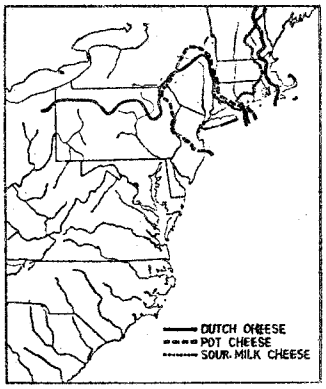
79) *pig pen* はアメリカで造られた語であるが，*pig sty* はイギリスで用いられた古い語である。この地方では，イギリスの古い語がそのまま残っていることになる。Marckwardt & Quirk, ibid, pp. 34–35.

80) 注 81) 参照。

81) *cottage cheese* を表わす語は，このほかにまだ，*pot cheese, Dutch cheese* がある。この中 *sour-milk cheese* の分布は図–18, のように海岸地帯に限られている。図–19 はこの三者の分布範囲の境界線を示したものである。山崎英夫, ibid, p. 25, p. 121 及び Kurath, ibid, Fig. 8, 125 参照。



図—18

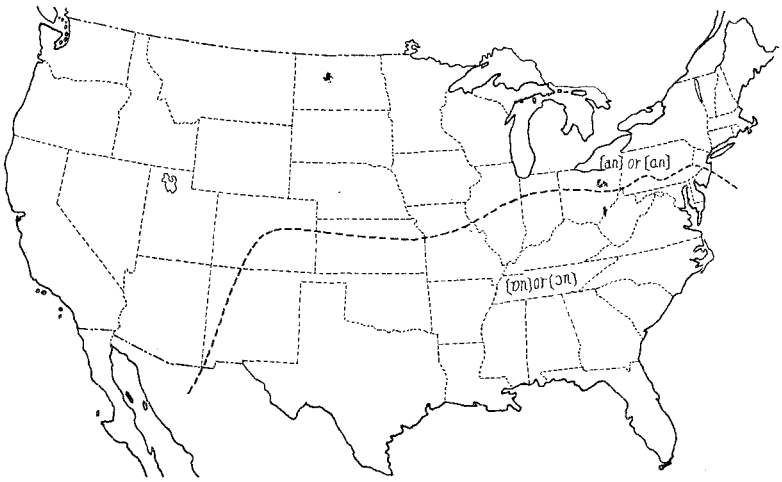


図—19

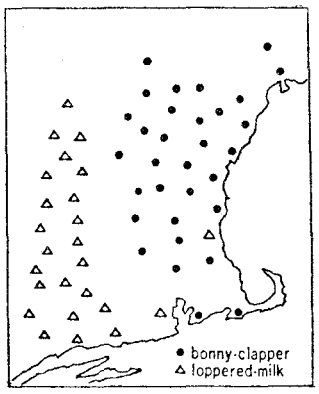
82) この *on* の発音分布に関しては Thomas が図–20 のような境界線を定めている。Bronstein, ibid, p. 306 参照。

83) Krapp, ibid, *Volume I*, p. 161 参照。The word *stoop* is of Dutch origin, but its use has been extended, especially in the phrase "the front stoop," to regions beyond those of Dutch influence. Webster, in his dictionary of 1828, defines *stoop* as meaning in America "a kind of shed, generally open, but attached to a house, also, an open place for seats at a door." Thornton gives example in English as early as 1749. The *stoop* is defined by Irving, *Knickerbocker History*, as "the porch, commonly built in front of Dutch houses, with benches on each side." It was usually uncovered, and is well illustrated in the *Century Dictionary*, under *stoop*. One may note in passing that the varyingly proper use of *stoop, porch, piazza, gallery,* is only to be acquired by familiarity with local custom.

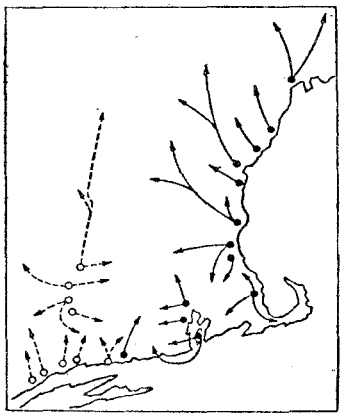
84) この意味 (curdled sour milk) では，*bonny-clapper* と *loppered milk* という二語がある。New England における東方からと西方からの移住のあとを示すもので，Kurath の「アメリカ東部諸州の言語分布」を参照して図表をつくると，図–21, 図–22 のようになる。図–21 では，*bonny-clapper* が東部に分布し，



図—20



図—21



図—22

loppered-milk は西部に広がっていることがわかる。なお，この図-22は，その移動の方向を示す。山崎英夫, ibid, p. 45. 及び Kurath, ibid, Fig. 124 参照。

85) 注 79) の分布地図参照。

86) イギリスではこの意味では用いられない。アメリカにおける用例としては 1875 年のものがある。*OED.*

87) 注 80) の *on* の分布図参照。

88) アメリカでは，特にオランダ改革教会の牧師のことをいうが，口語で一般にひろく牧師のことを指すようになった。大文字を用いるのはこの地方の特色である。*Webster's New World Dictionary of the American Language* (以下 *NWD* と略す)。

89) その分布状況については 注 79) の地図参照。

90) 注 80) の分布図参照。

91) Marckwardt, ibid, p. 139.

92) Marckwardt, ibid, pp. 145-146 参照。At times, too, changes in meaning seem to have entered into the dialect situation, as is illustrated by the development of the regional terms *skillet* and *spider*,

the former current in the Midland and the Virginia Piedmont, the latter in the North and in the Southern tidewater area. *Frying pan* is the urban term and is slowly supplanting the others. *Spider* was originally applied to the cast-iron pan with short legs, from which the name was presumably derived, but it was ultimately transferred to the flat-bottomed pan as well. This would seem also to explain the local term *creeper*, used in Marblehead, Massachusetts. *Skillet*, a term of doubtful etymology, first appears in English in 1403, when it was applied to a long-handled brass or copper vessel used for boiling liquids or stewing meat. It is still so used in dialects throughout England. The shift in meaning to a frying pan took place only in America, but an advertisement of 1790, offering for sale 'bakepans, spiders, skillets,' would suggest that even as late as this a distinction between the two was recognized.

93) Marckwardt, ibid, p. 140.

94) Marckwardt, ibid, p. 140.

95) 尾上政次, ibid, p. 29 参照。

96) Marckwardt, ibid, p. 140.

97) Marckwardt, ibid, p. 140.

98) 例えば food の中の母音を発音する時のように。Marckwardt, ibid, p. 139.

99) Marckwardt, ibid, p. 139.

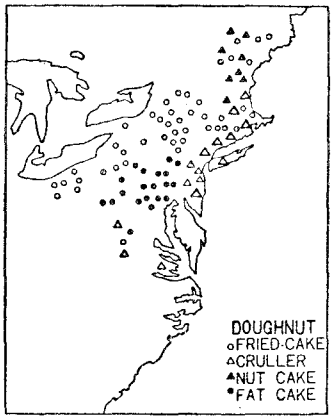
100) 注 67) 参照。

101) Marckwardt & Quirk, ibid, p. 65.

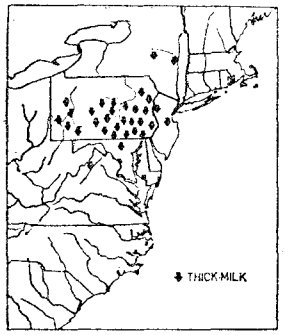
102) Marckwardt, ibid, p. 143 参照。彼は次のように述べている。The baby carriage seems to have been a development of the 1830's and '40's, and this is the term which developed in New England. Within the Philadelphia trade area, however, the article became known as a *baby coach*, whereas *baby buggy* was adopted west of the Alleghenies and *baby cab* in other regions throughout the country.

103) これは Pennsylvania German の典型的な語の一つで，同じ意味を持つ他の三つとともに分布状況を示すと，図-23 のようになる。山崎英夫, ibid, p. 83 及び Kurath, ibid, Fig. 120 参照。

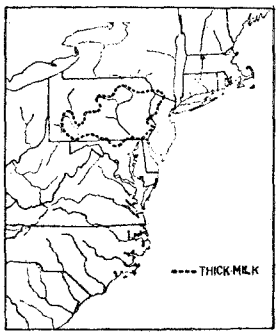
104) ドイツ語の *dickemilich* からきた。これを分布地図で示すと，図-24, 図-25 のようになる。山崎英夫, ibid, p. 32 及び Kurath, ibid, Fig. 23, 124 参照



図—23



図—24



図—25

105) Pennsylvania Dutch の語の一つで，オランダ語からの借用語である。*NWD.*

106) 注 72) 参照。この地域の特色は前置詞に *on* を用いることである。

107) この地域では，牛が戸外で乳を絞られるからであると，Marckwardt は次のようにいう。

It is not surprising that those areas of the country where cows can be milked outside, for at least part of the year, will develop a specific term for the place where this is done: witness *milk gap* or *milking gap* current in the Appalachians south of the James River. Marckwardt, ibid, p. 143.

108) 尾上政次, ibid, p. 30 参照。

109) Kenyon & Knott, *A Pronouncing Dictionary of American English*. Springfield; G. & C. Merriam Company, 1953, 及び尾上政次, ibid, p. 1 参照。

110) Marckwardt, ibid, p. 138.

111) Marckwardt, ibid, p. 138.

112) Marckwardt, ibid, p. 138.

113) Marckwardt, ibid, p. 138.

114) Marckwardt, ibid, p. 138.

115) Marckwardt, ibid, p. 138.

116) Marckwardt, ibid, p. 140.

117) Marckwardt, ibid, p. 140.

118) Marckwardt, ibid, p. 140.

119) 尾上政次, ibid, p. 142 参照。

120) Marckwardt, ibid, p. 138.

121) Marckwardt, ibid, p. 138.

122) Marckwardt, ibid, p. 138.

123) Marckwardt, ibid, p. 138.

124) Marckwardt, ibid, p. 138.

125) 注 81) 参照。

126) *Cooter*, a name applied to a box turtle in the Carolinas, is derived from an African word, *kuta* or *nkuda*, by the DAE, but is not traced before 1832. Mencken, ibid, *Supplement I*, p. 198.

127) 一般的には, *pinda*, *pindar*, *pinder* などと綴り, *pindal* ということもある。ポルトガル語の *pinda*, オランダ語の *piendel*, コンゴ語の *mpinda* 等から来ている。アフリカから黒人によってアメリカに入り, 現在では西インド諸島及びアメリカ南部で用いられている。1707 年から用例がある。*OED*.

128) *Buckra*, meaning a white man, is derived from an African word, *makana* or *mbakana*, of the same meaning, by Webster 1934, and traced to 1795 in white American use by the *DAE*, which notes that it was reported from the island of Antigua about six years earlier. Save in a few areas it never spread from Negro speech to that of the whites, and at the present day it is unknown to most Americans. Mencken, ibid, *Supplement I*, p. 198.

129) 尾上政次, ibid, p. 29 参照。

130) Marckwardt, ibid, p. 140.

131) Marckwardt, ibid, p. 140.

132) Marckwardt, ibid, p. 140.

133) Marckwardt, ibid, p. 140.

134) このような表現は特にこの地域に多く, *use to could*, *use to wasn't* なども用いられる。Mencken は, これについて次のように言う。Another characteristic of vulgar American is the heavy use of *used to* as a general indicator of the past. It is always given the unvoiced *s* without a final *d*, and may be used also in the negative as in "He *use to didn't* like it." Wentworth and other scouts have found *use to could*, *would*, *was* and *wasn't* in all parts of the country, but especially in the South and South Midland. *Use to could* was listed by Sherwood in the vocabulary accompanying his "Gazetteer of the State of Georgia" (1827), and in 1850 William C. Fowler put it among "ungrammatical expressions, disapproved by all," in his chapter on American dialects in "The English Language." Today, however, *use to could* is in good standing in Southern familiar colloquial speech, and even *use to didn't* and *use to wasn't* are occasionally heard from educated Southerners.

Mencken, H. L. *The American Language* (*One-Volume Abridged Edition*), New York: Alfred A. Knopf, 1963, pp. 540–541.

135) 勿論このような言い方も，主観的で relative なものであることは否定出来ない。例えば Marckwardt & Quirk, ibid, pp. 62–63 で Marckwardt が示した発音の地域差を，実際に録音したもので聞いてみると（それらはやや極端な例であるには違いないが），その相違が非常に顕著なことに驚ろかされる。

136) 通常の発音記号でその相違を記述することが出来ないことからも，このことは言えよう。特に native speaker でない，われわれが考察する場合は尚更である。注 62) 参照。

137) ドイツ語の *Regenwurm* の影響である。次の注 138) 参照。

138) この *earthworm* に関する歴史的背景については，Marckwardt は次のような興味ある分析を行なっている。"Earthwom itself is not an old word; it appears to have been compounded only shortly before the earliest English migrations to America. The earliest *Oxford English Dictionary* citation of the word in its present form is 1591; it appears also as *yearth worm* some thirty years earlier. The various regional terms all seem to have been coined in America; the dictionaries either record no British citations or fail to include the words at all.

The local terms have a varied and interesting history. *Mud worm* seems to occur in standard British English from the beginning of the nineteenth century on. *Eace worm*, as a combined form, goes back at least to Middle Englsh; the first element was a term for 'bait' as early as Aelfric; it is used today in a number of southern counties in England from Kent to Gloucester. *Angle dog* is used currently in Devonshire. *Ground worm*, though coined in England, was transferred to North Carolina and Maryland in the eighteenth century. *Red worm* appears first in England in 1450 and continues through to the mid-nineteenth century, though chiefly in books on fishing, as does *dew worm*, which goes back even farther to the late Old English period. *Rainworm*, though it appears in Aelfric as *renwyrm*, may be a reformation, even in British English, on the pattern of *Regenwurm* in German, for there is a gap of seven centuries in the citations in the *Oxford English Dictionary* and there is reason to believe that its revival in 1731 was influenced by the German form. Moreover, with but one exception, it has been cited for the United States only in areas settled by Germans. Thus we have in the standard cultivated term one of relatively recent British formation. Apparently the regional terms were compounded in America, whereas the local terms represent survivals either of dialect usage or anglers' jargon and one loan translation. It is worth noting that the common Old English term, *angle twicce*, surviving as *angle twitch* in Cornwall and Devon, seems not to have found its way to America, and there are, furthermore, such other English formations as *tag worm*, *marsh worm*, and *garden worm* which have not been recorded in America." Marckwardt, ibid, pp. 144–145.

139) アメリカ英語における方言の地域的相違が少ない重要な理由の一つとして，アメリカ人の特性であるこのような mobility を見落すことは出来ない。Dotty & Ross は，このアメリカ人の mobility に関して次のように言う。"As people moved about, local dialects did not develop to any extent. The same manner of speaking was used throughout the country. There are some regional differences in pronunciation, and certain areas betray, through peculiarities of expression, the national origin of the major element of the population within that area, but the English language as spoken in America (Canada as well as the United States) exhibits a uniformity not found in any other language over a comparable area. Mass media of communication, as well as the public school system, perpetuate this uniformity. The speech of an American from any region of the country offers only superficial differences from that of an American from any other section."

Dotty, Gadys G. & Ross, Janet. *Language and Life in the U.S.A.* New York: Row, Peterson and Company, 1960, p. 245.

140) Stewart, George R. *American Ways of Life*, New York: Doubleday Co., Ltd. 1954, 成美堂版, pp. 13–14.

附 表

THE INTERNATIONAL PHONETIC ALPHABET.

(Revised to 1951.)

		Bi-labial	Labio-dental	Dental and Alveolar	Retroflex	Palato-alveolar	Alveolo-palatal	Palatal	Velar	Uvular	Pharyngal	Glottal
CONSONANTS	Plosive	p b		t d	ʈ ɖ			c ɟ	k g	q ɢ		ʔ
	Nasal	m	ɱ	n	ɳ			ɲ	ŋ	ɴ		
	Lateral Fricative			ɬ ɮ								
	Lateral Non-fricative			l	ɭ			ʎ				
	Rolled			r						ʀ		
	Flapped			ɾ	ɽ					ɢ		
	Fricative	ɸ β	f v	θ ð | s z | ɹ	ʂ ʐ	ʃ ʒ	ɕ ʑ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
	Frictionless Continuants and Semi-vowels	w | ɥ	ʋ	ɹ				j (ɥ)	(w)	ʍ		

		Front	Central	Back
VOWELS	Close	i y (y ʉ u)	ɨ ʉ	ɯ u
	Half-close	(ø o)	ɘ ɵ	ɤ o
	Half-open	(œ ɔ)	ɛ ɜ ɞ ɐ	ʌ ɔ
	Open	(ɒ)	a ɑ	ɑ ɒ

(Secondary articulations are shown by symbols in brackets.)

OTHER SOUNDS.—Palatalized consonants: ʈ, ɖ, etc.; palatalized ʃ, ʒ: ʃʲ, ʒʲ. Velarized or pharyngalized consonants: ɫ, ɖˤ, sˤ, etc. Ejective consonants (with simultaneous glottal stop): p', t', etc. Implosive voiced consonants: ɓ, ɗ, etc. ɾ fricative trill. σ, ʒ (labialized θ, ð, or s, z). ʔ, ʕ (labialized ʃ, ʒ). ʘ, ǀ, ǁ (clicks, Zulu c, q, x). l (a sound between r and l). ɲ Japanese syllabic nasal. ʃ (combination of x and ʃ). ʍ (voiceless w). ɩ, ʏ, ɷ (lowered varieties of i, y, u). ɜ (a variety of e). ɵ (a vowel between ø and o).

Affricates are normally represented by groups of two consonants (ts, tʃ, dʒ, etc.), but, when necessary, ligatures are used (ʦ, ʧ, ʤ, etc.), or the marks ‿ or ‿ (t͡s or ts‿, etc.). ‿ ‿ also denote synchronic articulation (m‿ŋ = simultaneous m and ŋ). c, ɟ may occasionally be used in place of tʃ, dʒ, and ʧ, ʤ for ts, dz. Aspirated plosives: ph, th, etc. r-coloured vowels: eɹ, aɹ, oɹ, etc., or eʳ, aʳ, oʳ, etc., or ɚ, ɑ˞, ɔ˞, etc.; r-coloured ə: əɹ or əʳ or ɹ or ə˞ or ɚ.

LENGTH, STRESS, PITCH.— : (full length). ˑ (half length). ' (stress, placed at beginning of the stressed syllable). ˌ (secondary stress). ˉ (high level pitch); ˍ (low level); ˊ (high rising); ˎ (low rising); ˋ (high falling); ˏ (low falling); ˆ (rise-fall); ˇ (fall-rise).

MODIFIERS.— ˜ nasality. ̥ breath (l̥ = breathed l). ̬ voice (s̬ = z). ʰ slight aspiration following p, t, etc. ̪ labialization (n̪ = labialized n). ̪ dental articulation (t̪ = dental t). ʲ palatalization (tʲ = ʧ). ̝ specially close vowel (e̝ = a very close e). ̞ specially open vowel (e̞ = a rather open e). ̟ tongue raised (e̟ or e̝ = e̞). ̠ tongue lowered (e̠ or e̞ = e̝). ̟ tongue advanced (u̟ or ʉ = an advanced u, t̟ = t̪). ̠ or ̠ tongue retracted (i̠ or ɨ = ɨ̟, t̠ = alveolar t). ̹ lips more rounded. ̺ lips more spread. Central vowels: ɨ (= ɨ), ʉ (= ʉ), ë (= ə̟), ö (= e̞), ä, ɔ̈. ̩ (e.g. n̩) syllabic consonant. ̯ consonantal vowel. ʃʲ variety of ʃ resembling s, etc.

(昭和41年4月30日受理)